

福井の科学者

地域に根ざす科学者運動 117

2012・2

目 次

森鷗外的重要作品「空車」について

高 木 秀 男 (1)

10月2日に羽咋市防災総合訓練

住民組織が訓練の監視行動

- 県内初の原発事故も想定した自治体訓練 -

児 玉 一 八 (10)

原発問題を学ぶ—敦賀フィールドワークに行って

八十島 真 奈 (17)

学生企画科目を通して考える

~ “福島” と “日本” における “無関心” ~

内 藤 有 希 (22)

夭折した女性活動家・伊藤千代子のこと

高 木 秀 男 (27)

= 新著紹介 =

西條敏美著『測り方の科学史 地球から宇宙へ』恒星社厚生閣

高 木 秀 男 (34)

編集後記

(36)

日本科学者会議福井支部

= 新刊紹介 =

高木秀男著

『近代日本の教育政策と科学技術体制 上、下
- 学問・思想の自由と科学者の社会的責任 - 』（科学堂）



目 次

- 第1章 尊皇攘夷から文明開化へ
- 第2章 日本の近代化と近代科学・技術の全面的導入
- 第3章 大正デモクラシーと時代の雰囲気
- 第4章 近代日本における科学の制度化
- 第5章 戦争のための国家総動員法と科学・技術動員
- 第6章 占領下での民主主義の導入と民主教育の始動
- 参考文献
- あとがき
- 人名索引

A 5 判上製 836 頁 定価上下セットで 8,000 円

限定 200 部 注文は下記まで

高木秀男：fwnf2030@mb.infoweb.ne.jp

(910・0034 福井市菅谷 1 丁目 14 - 4)

TEL / FAX 0776 - 22 - 2715

森鷗外の重要作品「空車」について

高 木 秀 男 (日本科学者会議福井支部)

1. はじめに

2011 年 11 月 10 日、京都市にある基礎経済科学研究所の自由大学院校長をしている法哲学者の中村浩爾氏より、兵庫県立神戸高等学校 17 回生九条の会発行の機関誌『Castillo Ueno』12 号を送っていただいた。私が以前に出版した『事例から学ぶ科学社会学—そのとき科学者は権力・権威にどう立ち向かったか—』(科学堂)¹⁾ の、第 1 章に書いた「医学者としての森鷗外」を中村氏が読んでいて、『Castillo Ueno』12 号に掲載された直木幸次郎 (1919 ~) 大阪市大名誉教授の「森鷗外は天皇制をどう見たか—『空車』を中心に—」²⁾ に私が興味を持つだろうとの親切心からであった。実際、直木氏 (以下敬称略) の論考は非常に興味深いものだったので、感想を書いておきたいと思った次第である。

2. 「空車」の原文

森鷗外の「空車」は 1916 年 7 月 6・7 日、『東京日日新聞』(『毎日新聞』の前身) と『大阪毎日新聞』に連載された短文である。その原文³⁾ を読んだことのある人は少ないだろうから、まずその全文を以下に紹介する³⁾。

「空車」

むなぐるまは古言^{こげん}である。これを聞けば昔の絵巻にあるやうな物見車が思ひ浮べられる。

總て古言はその行はれた時と所との色を帯びてゐる。これを其儘^{そのまま}に取つて用ゐるときは、誰^{たれ}も其間に異議^{さしはさ}を挟むことは出来ない。しかしさうばかりしてゐると、其詞^{ことば}の用ゐられる範圍が狭められる。此範圍はアルシャイズムの領分を

限る線に由つて定められる。そして其詞は擬古文の中にしか用ゐられぬことになる。

これは窮屈である。更に一步を進めて考へて見ると、此窮屈は一層甚だしくなつて来る。何故であるか。今むなぐるまと云ふ詞を擬古文に用ゐるには異議が無いものとする。ところで擬古文でさへあるなら、文の内容が何であらうと、古言を用ゐて好いかと云うに、必ずしもさうで無い。文體にふさはしくない内容もある。都の手振^{てぶり}だとか北里^{ほくり}十二時^{とき}だとか云ふものは、讀む人が文と事との間に調和を關^かいでゐるのを感じずにはゐない。

此調和は讀む人の受用を傷ける。それは時と所との色を帯びてゐる古言が濫用せられたからである。

しかし此^こに言ふ所は文と事との不調和である。文自體に於ては猶調和を保つことが努められてゐる。これに反して假に古言を引き離して今體^{こんたい}文^{ぶん}に用ゐたらどうであらう。極端な例を言へば、これを口語體の文に用ゐたらどうであらう。

文章を愛好する人は之を見て、必ずや憤慨するであらう。口語體の文は文にあらずと云ふ人は姑^{しばら}く置く。これを文として視^みることを容^{ゆる}す人でも、古言を其中に用ゐたのを見たら、希世^{きせい}の寶が粗暴な手に由つて毀^これたのを惜しんで、作者^{ろう}を陋^{ろう}とせずにはゐぬであらう。

以上は保守の見解である。わたくしはこれを首肯する。そして不用意に古言を用ゐることを嫌ふ。

しかしわたくしは保守の見解にのみ安住してゐる窮屈に堪へない。そこで今體文を作つてゐるうちに、ふと古言を用ゐる。口語體の文に於

でも亦^{またん}恬としてこれを用ゐる。著^{ちやく}意^いして敢て用ゐるのである。

そして自分で自分に分^{いいわけ}疏^しをする。それはかうである。古言は寶である。しかし什^{じふしふ}襲^ししてこれを蔵^たして置くのは、寶の持ちぐされである。縦^たひ尊重^として用ゐずに置くにしても、用ゐざれば死^し物^{ぶつ}である。わたくしは寶を掘^いり出して活^いかしてこれを用ゐる。わたくしは古言に新なる性命を與^たへる。古言の帯びてゐる固有の色は、これがために滅^めびよう。しかしこれは新なる性命に犠^い牲^せを供するのである。わたくしはこんな分^た疏^とをして、人の誚^{そしり}を顧^{かえり}みない。

わたくしの意中に言はむと欲する一事があつた。わたくしは紙^のを展^のべて漫然空車と題^をした。題^をし畢^はつて何と讀^よまうかと思つた。音讀すれば耳^{みみ}に聴^きいて何事とも辨^わへ難^{がた}い。然^{しか}らばからぐるま^まと訓^なまうか。これはいかにも懐^{なつ}かしくない詞である。その上輕^ひさうに感^{かん}ぜられる。瘦^うせた男が躁^{そう}急^{きふ}に挽^ひいて行きさうに感^{かん}ぜられる。此^こ感^{かん}じはわたくしの意中の車と合^あ致^しし難^{がた}い。そこでわたくしはむなぐるまと訓^なむことにした。わたくしは著^{ちやく}意^いして此古言の帯びてゐる時と所との色を奪^うつて、新なる語としてこれを用ゐるのである。そして彼^かの懐^なかしくない、輕^かさうに感^{かん}ぜさせるからぐるまの語を忌^い避^ひするのである。

空車^{むなぐるま}はわたくしの往々街上に於て見る所のものである。此車には定めて名があらう。しかしわたくしは不敏^{ふみん}にしてこれを知らない。わたくしの説明に由^{よし}つて、指^さす所の何の車たるを解^とした人が、若^{その}し其^な名を知^しつてゐたなら、幸^しに誨^{をし}へて貰^{もら}ひたい。

わたくしの意中の車は大いなる荷車である。其構造は極めて原始的で、大八車と云ふものに似^にてゐる。只^{ただ}大きさがこれに數倍してゐる。大八車は人が挽^ひくのに此車は馬が挽^ひく。

此車だつていつも空虚でないことは、言^まを須^す

たない。わたくしは白^{はく}山^{さん}の通^とで、此車が洋紙^{ようし}を捆^{こん}載^{さい}して王子から來るのに逢^あふことがある。しかしさう云ふ時には此車はわたくしの目にとまらない。

わたくしは此車が空車として行くに逢^あふ毎^{まい}に、目迎^{めむか}へてこれを送^{おく}ることを禁^いじ得^えない。車は既に大きい。そしてそれが空虚であるが故^ゆに、人をして一層その大きさを覺^{おぼ}えしむる。この大きい車が大道狭^{せう}しと行く。これに繋^ついでである馬は骨格^{こつかく}が逞^{たくま}しく、榮^え養^{よう}が好^よい。それが車に繋^つがれたのを忘^{わす}れたやうに、緩^{ゆる}やかに行く。馬の口を取^とつてゐる男は背^{すべ}の直^ちい大男である。それが肥^ふえた馬、大きい車^{れい}の靈^{れい}でもあるやうに、大^{おお}股^こに行く。此男は左^さ顧^こ右^う眄^めすることをなさない。物に遭^あつて一歩を緩^{ゆる}くすることもなさず、一歩を急^{いそ}にすることをなさない。旁^{ぼう}若^{じやく}無^む人^{じん}と云ふ語^ごは此男のために作^{つく}られたかと疑^うはれる。

此車に逢^あへば、徒^よ歩^ぽの人も避^よける。騎^き馬^ばの人も避^よける。貴^き人^{にん}の馬車も避^よける。富豪^{ふごう}の自動車も避^よける。隊^{たい}伍^ごをなした士^し卒^{そつ}も避^よける。送^{よこ}葬^{さう}の行列^{ぎやう}も避^よける。此車^この軌^き道^{どう}を横^{よこ}るに會^あへば、電^{でん}車^{しゃ}の車^{くるま}掌^{てい}と雖^{いふ}も、車^{くるま}を駐^{とど}めて、忍^{しの}んでその過^あぐるを待^{まち}たざることを得^えない。

そして此車は一^{むなぐるま}の空^{くう}車^{しゃ}に過^あぎぬのである。

わたくしは此空^{くう}車^{しゃ}の行くに逢^あふ毎^{まい}に、目迎^{めむか}へてこれを送^{おく}ることを禁^いじ得^えない。わたくしは此空^{くう}車^{しゃ}が何物^{なんぶつ}をか載^のせて行^いけば好^よいなどとは、か^かけても思^{おも}はない。わたくしが此空^{くう}車^{しゃ}と或^{ある}物^{ぶつ}を載^のせた車^{くるま}とを比^ひ較^{かく}して、優^{ゆう}劣^{りつ}を論^{ろん}ぜようなどと思^{おも}はぬことも、亦^{また}言^{こと}を須^すたない。縦^たひその或^{ある}物^{ぶつ}がいかに貴^{たか}き物であるにもせよ。

3. 森鷗外は「空車」で何が言いたかったのか

森鷗外の「空車」は私の所有している『日本の文学 2 森鷗外 (一)』(中央公論社)、『日本現代文学全集 7 森鷗外集』(講談社)、『新潮日本文学 1 森鷗外集』(新潮社)のいずれの

中にも、鷗外のいろいろな作品と一緒におさめられている。文学全集の中の一冊にどの作品を盛り込むかは、編集者の作品選択にかかっている。いずれの全集にも「空車」が選択され掲載されているということは、「空車」がいちおう森鷗外の重要な作品として認識されているということを表しているといえよう。

長編小説の場合は、限られたページ数の関係で重要作品であっても割愛せざるを得ないという事情があるから、選者は長いものほどどれを入れるか頭を悩ませることになる。その点、「空車」はごく短いものなので選択され安いということはあったであろう。上記の各本の後ろには解説がつけられており、どういう観点から作品の選択がなされたがわかる。だがいずれの本にも「空車」についての言及はない。だからどういう意味でそれが重要な作品と判断されたかはわからない。その意味では掲載はされているが、非常に重要な作品という扱いではないとも取れる。

「空車」は比喩的で抽象的な作品で分かりにくい作品なので、森鷗外が「空車」という作品で何が言いたかったのかについては、これまで何人かの人が言及している。その内容が直木氏の論考でも紹介されている。直木氏の論考ではそれらを紹介したうえで、それらを批判し自分の考えを主張している。私自身は学生時代に前記の講談社版『森鷗外集』³⁾を買い、「空車」の所にチェックが入っていることから、学生時代に読んだことが知れるが、内容についてはまったく記憶になかった。おそらくまだ若かった私には、内容が理解できず強い印象の作品ではなかったからであろう。私は直木氏の論考の冒頭に紹介されている「空車」の原文を今回改めて読み、この作品の重要性に気付いた。前記の「医学者としての森鷗外」を執筆するにあたって、多少なりとも鷗外のことを勉強していたか

らであろう。

私が原文を読んで感じた率直な感想と、直木氏の論考の後半に書かれている彼の主張がまったく同じものであったのに驚いた次第である。ではこれまで「空車」の解釈についてどのような説が唱えられていたのであろうか。日銀マンで森鷗外に関する膨大な研究書を著わした吉野俊彦(1915～2005)は、『虚無からの脱出一森鷗外』(PHP)⁴⁾のなかで、つぎのように紹介している。

「空車」は鷗外が陸軍を引退後わずか10日後に執筆されたものである。したがって引退直後の鷗外の心境を、この象徴的文章の中からどのように汲みとるのかについて、多くの鷗外研究家がいろいろな角度から論及してきた。比較文学者・小堀桂一郎(1933～)東大名誉教授は、「多年の官職の重荷を下して空になった我身の似姿」であるという見解を示している⁵⁾。吉野はこの見方に賛意を示している。

評論家の唐木順三(1904～80)はもっと具体的に、陸軍引退後の解放感、実用主義との訣別から進んで、傍若無人に『澁江抽齋』以下の史伝に取り組んでいく覚悟を述べたものとした⁶⁾。また国文学者の吉田精一(1908～84)は、空車を史伝にたとえ、空車をひく馬の口をとる傍若無人の大男を鷗外にたとえた⁷⁾。

国文学者の長谷川泉(1918～2004)は、従来「空車」が1916年4月23日に脱稿され、5月6・7日に『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に載せられてという通説の誤りを指摘した国文学者の三好行雄(1926～90)の主張⁸⁾をふまえた上で、なぜ1916年7月6・7日まで公表されなかったかを考察した。そしてその理由は、引退後の鷗外の貴族院入りを陸軍が画策していたため、それを考慮した結果ではないかと推測し、その推測が正しければ「空車」は陸軍引退後の鷗外の最も自由なる気分のあふれた重

要なる文献であり、最後の遺言状にもつながるものであると述べた⁹⁾。

これら先人の考察をうけて吉野自身は、引退によって浪人＝空となった感慨を車に擬したとしたうえで、それは引退直前の 1916 年 3 月 25 日、それまで陸軍省に置いてあった私物を、2 台の車にのせて観潮楼に還ったとき、その私物が楼内の書庫に収められ、空になった車をみて、長年の陸軍生活とこれでおさらばという実感が湧いたことから生じたのではないかという説を述べている。

さらに「空になった車はあくまで、引退直後の鷗外の心境を記す道具に過ぎない。この空は、戒律のきびしい陸軍というサラリーマン生活から解放され自由人となった鷗外のあらゆる可能性をはらんだ状態を暗示していると考えるとき、まことに重要な意味をもっている。そして引退後の今後こそは、他人に何といわようとかわわぬ、自分がそれによって自分の生命を燃焼しきれる対象があるならば、傍若無人にそれに突入するのみであるというのが、『空車』のいわんとするところであろう」と書いている。

以上の説とまったく違う見解を示しているのは、松本清張 (1909 ～ 92) である。彼は『両像・森鷗外』(文藝春秋)¹⁰⁾の中で「空車」にふれ、次のような独自の見解を述べている。「鷗外が漢語を使用するときには、いちおう典拠があると疑ってかからねばならない。……「空車」は「虚車」の替え字ではないだろうかとは私は考えてみた。」「無用に飾り立てられた虚車と暗喩するのは、私の推測では、白樺派のことを指していると思う。この時期、武者小路を先頭とする白樺派の活躍はめざましいものがあり、世はこれを清新な文学運動として大いに迎えていた。その旺^{さか}んな勢いを考えると、この白樺派の「空車」の通過する前では貴人の馬車、富豪の自動車から電車まで停まるという「そこのけそこ

のけお馬が通る」ていの威勢になっている比喻であろう。その車が原始的な大八車というのは、武者小路実篤 (1885 ～ 1976)、有島武郎 (1878 ～ 1923)、倉田百三 (1891 ～ 1943) などの白樺派の未熟・稚拙を表し、この車が王子から洋紙 (印刷用紙) を積んでくるというのは白樺派作家たちの本の売れ行きぶりをさしている。鷗外の眼からみると、白樺派の「思想」などというものは、何も内容のない、無きにひとしいものであり、その「文学」も児戯に近いものであったろう。「空車」が何も積んでいない、というのはこれでわかる。」

これら諸氏の説に対し池内健次 (1929 ～) は、『森鷗外と近代日本』(ミネルヴァ書房)のなかで、これまで紹介した論者とはまったく違う見解を示し¹¹⁾、直木幸次郎もそれを支持する見解を発表したわけである。池内は次のように書いている。

「「空車」においては鷗外はたしかに主題を隠し、故意にあいまいな文章にしているが、彼が隠した主題を私たちが強いて名づければ、日本の伝統、もっと規範的に言えば、天皇制、天皇的日本の雅の伝統あるいは雅と礼の文明の歴史、ということではないかと思われる。それはもともとから空虚であったわけではないが、今、近代においては、天皇制も礼の文化も形式だけの空虚なものでしかない。しかし鷗外は、それを優雅で堂々として美しい礼の形であるかぎり、満足げに肯定しているのである。そして、もし天皇制がここで寓意されているならば、明晰な文章を書く鷗外がこんなあいまいで意味不明な文章によって心を陳べたことも、充分納得できる。天皇制を空虚というのは不敬となるであろうからである。」

池内は、当時の鷗外のおかれていた状況や鷗外の作品の分析からこのような解釈をした理由を縷々述べている。直木幸次郎は先の論考の中

で池内の見解を支持する立場から、それを補足するべく様々な指摘をしている。

4. 「空車」を再読して感じたこと

以下、「空車」を再読した筆者の感想を述べることにする。「空車」は確かに隠喩的で鷗外が何を言いたかったのかは、一読して明解と言えるような作品ではない。「空車」は前半（上）と後半（下）の二つの部分に分かれているが、筆者が感じた第一のことは、鷗外の主張の眼目は下の後半分（わたくしは此車が空車として行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。……）にあるのではないかということであった。すなわち、いかにももったいぶった上の部分の文章は、下の後半部分への導入部であり、かつ必要なオブラートだったのだらうという感想をもった。

直木の論考の最初に出てくる「空車」の原文を読んだときの私の感想は、下の後半部分の記述から、これは天皇および天皇制の実態を直接的な表現ではなく象徴的に書いたのだらうというものであった。そしてそのことが直木の論考の結論でもあったため、私は自分の感想に自信を深めた。直木は論考の中で鷗外がなぜ「空車」を書いたかについて、次のように論じている。

鷗外は長く陸軍の高級官僚の地位にいたが、1907年に軍医としては最高の陸軍省医務局長兼軍医総監に任ぜられ、政治の実態にもふれ、日本の政治が薩長を中心とする藩閥政府の実力者によって動かされていたことを知ったと思われる。天皇制支配は表面だけのことで、実際には形骸化されていたことを認識したに違いない。天皇の操り人形化は、おそらく明治天皇（1852～1912）の時代にはじまり、大正天皇（1879～1926）の時代に一層すすんだことと思われる。

このことを鷗外は何らかの形で書き残したいと、かねてから思っていたであろう。1911

年1月に天皇を暗殺しようとしたという理由で、事件と無関係の人を含めて12人が死刑になった大逆事件が、その契機の一つではなからうか。彼はこのとき「かのように」など数編の論説を発表し、判決のゆきすぎであることを論ずるとともに、天皇の神聖性に疑問を投じているが、天皇の形骸化や天皇そのもののまでは筆が及んでいないのである。このとき鷗外はまだ現役の軍医であったので、そこまで筆を延ばすのは憚られた。しかし1916年4月、官を退いて野の人になったので、もう一度天皇のことを論じようと考えたのであろう。そして池内も指摘しているように、1915年11月に京都で行なわれた大正天皇の即位式に参列したことが、「空車」という形で天皇を論ずる原因となったと思われる。

この直木の見解に私は全面的に賛成する。私は鷗外の重要作品で多くの人が言及している「かのように」もこの機会に再読したが、直木の論文「日本古代史の研究と学問の自由」¹²⁾に書かれた次の主張はよく理解できた。

「神話は歴史ではない、神は事実ではない、それは明らかなことだが、それを認めると危険が生じる。それで神は存在するかのように、神話は歴史であるかのように取り扱って行こうというのであります。（中略）天皇の神聖性の根拠である神話を信じない。天皇に忠節をつくす義務を認めない。明治憲法体制のもとでこれほど危険な思想はありません。しかし「かのように」の哲学に従えば、天皇の神聖性は神話——なかんづく天照大神の天壤無窮の神勅——によって保証され、忠義はもっとも崇高な義務となります。「この位安全な、危険でない思想はないじゃないか」と鷗外が秀麿にいわせているのは、まことにもっともなことです。」

鷗外の晩年の重要作品「かのように」（1912年1月）、「空車」（1916年7月）や「濯江抽

齋」(1916 年 1 月～5 月)、「伊澤蘭軒」(1916 年 6 月～9 月)、「北条霞亭」(1917 年 10 月～1919 年 1 月)の考証三部作と有名な彼の遺言(1922 年 7 月)を並べ、さらに鷗外の年譜と見比べてみれば、それらを書いた当時の鷗外の心の内が推察される。陸軍軍医(高級官僚)と高名な文学者という二つの顔をもった鷗外の晩年の揺れ動いたであろう心境の到達点が、次の彼の有名な遺言に収められたのではないだろうか。

「余は少年の時より老死に至るまで一切秘密無く交際したる友は賀古鶴所君なり。ここに死に臨んで賀古君の一筆を煩わす。死は一切を打切る重大事件なり。奈何なる官権威力と雖も此に反抗する事を得すと信す。余は石見人森林太郎として死せんと欲す。宮内省陸軍省皆縁故あれども生死別る瞬間あらゆる外形的取扱ひを辞す。森林太郎として死せんとす。墓は森林太郎墓のほか一字もほる可からず。書は中村不折に依託し宮内省陸軍の栄典は絶対に取りやめを請ふ。手続はそれぞれあるべし。これ唯一の友に云ひ残すものにして何人の容喙も許さす。」(大正十一年七月六日)

(賀古鶴所(1855～1931)は東京大学医学部の同期生である。原文には句読点はないが読みやすくするために句読点を入れた。)

この遺言には、明らかに出世を願った若い時の森林太郎の行動とは違った心境が表れている。彼がこれほど反権力的な遺言を書いたのはなぜか。この遺言をめぐって、多くの人がさまざまな意見を述べている。文学者の中野重治(1902～79)が「遺言状のこと」¹³⁾という評論を書き、彼の解釈をめぐって鷗外研究者のあいだで論争が生じた話はよく知られている。ちなみに中野自身も「中野重治の名を冠する文学賞、記念碑をつくってはならぬ。墓はあるのだから別に作ってはならぬ。……」という有名な遺言を残している。

晩年の鷗外が憂鬱であったと言う人は多い。それは間違いないだろう。近づいてきた老いの自覚もあったろうし、隠し続けてきた結核の問題や、「伊澤蘭軒」「北条霞亭」の新聞連載に対する不評も気になったであろう。また最初の妻登志子の子である長男の森於菟(1890～1967)が離婚したり、弟の潤三郎が当局の忌避に触れる図書刊行事件に連座して京都帝国大学を辞職し身辺も多事であった。

だが口にくそさなかつたが、陸軍兵食に関する彼自身の誤った見解への固執、その結果としての陸軍の脚気惨禍についての責任だけでも十分憂鬱であったろうし、それにかかわる脚気病調査会の討議の行方についての心配だけでも心の晴れない日が続いたに違いない。彼は脚気問題に関するかぎり裁判官であると同時に被告でもあったからである¹⁾。

そして森林太郎が晩年頼りにした陸軍の元老・山懸有朋(1838～1922)は、1921 年 11 月から体調をくずし、翌年 2 月 1 日に亡くなった。林太郎が亡くなる 10 ヶ月ほど前のことである。山懸は国葬のうえ小石川の護国寺に葬られ、「枢密院議長元帥陸軍大將従一位大勲位功一級公爵山懸有朋墓」という墓石が建てられた。華族との付き合いが多く身分制度を常に意識していた林太郎は、ひそかに男爵授爵を期待していたが、その望みは山懸の死去で事実上消えてしまった¹⁴⁾。

松本清張はこの遺言について、陸軍軍医として生き、ときとして文学者の顔を使い分けてきた鷗外が、死後は官吏から決別して文学者であることを宣言したものではないかという見解を示している¹⁰⁾。林太郎自身は 1899 年 6 月、小倉の第十二師団軍医部長に左遷され、1900 年 1 月に『福岡日日新聞』に発表した「鷗外漁史とは誰ぞ」では、「自分は小説家ではない」とことわり、「鷗外漁史は死んだ」と書いた。だが、

1917 年 9 月『斯論』に発表した「なかじきり」のなかでは「私は医をもって使えたが、多少社会に認められたのは文士としての生涯である」と書いている。小説家の福永武彦 (1918 ~ 79) は、鷗外の遺言に対し外なる権威から授けられる榮譽栄典がなくても、裸のままで充分すぎるほどの権威をもっているはずだという鷗外の自負の現われという解釈を示している¹⁵⁾。

このように鷗外の遺言の解釈についてはいろいろ議論のあるところであるが、私は鷗外の遺言について知ったとき、製本職人から科学者になったファラデー (1791 ~ 1867) のことを思い出した。彼は電磁気学への貢献からロンドン王立協会会員に選ばれ、晩年には王立協会会長に推挙されたり、国王からは年金やナイトの称号を授けるといふ申し出をされた。しかし、彼は「私は最後までただのマイケル・ファラデーでいたい」といってナイトの授爵や王立協会会長就任を辞退した。ロンドンのハイゲート墓地に静かに立つファラデー夫妻の墓には、二人の名前と生没年以外何一つ刻まれていない。清貧のファラデーにふさわしいすがすがしさである。鷗外はおそらくファラデーの故事を知らなかったであろうから、ファラデーの真似をしたわけではあるまい。彼は最後の最後になって、二つの顔のうち高級官僚としての顔はすて、自由人としての文学者の顔となり、その意地を示したのではなかろうか。

5. おわりに

さて、森鷗外に関する研究は森鷗外学会がつくられ、すでに鷗外に関するあらゆる事柄が微にいり細にわたり研究されている。したがって鷗外の作品もろくに読んでいない者が不用意に何らかの論評をすれば、恥をかくことになる。しかし素人はそんなことはあまり気にしない。筆者もまったくの素人なので、自分のすな

おな感想や思ったことを最後に何点か書いておきたい。

私はこの原稿を書くにあたって、さらにもう一度「空車」を読んでみた。その結果、「空車」の上の部分はなくても、下だけで鷗外の言いたかったことは十分述べられている気がした。だとするならば、鷗外はもしかしたら下を先に書き、あとで上の部分を書き足したのではないかという仮説に私は到達した。

「わたくしの意中に言はんと欲する一事があった。わたくしは紙を展^のべて漫然空車と題した。題し^を畢^はって何と読まうかと思った。……」と始めれば、鷗外が「言はんと欲する一事」があったので、「空車」という言葉に託してこの一文を書いたことがよりはっきりと読者にわかる。しかしその内容が天皇や天皇制にかかわることとなると、あからさまにすぐにそれと解る表現で書くわけにはいかない。そこで慎重に言葉を選び隠喩的な表現で文章化したが、さらに念を押して、鷗外の意図をオブラートにつつむために上の部分を書いて目くらまし・逃げ道、すなわち一種のレトリックとして加えられたのではないだろうか。

森は 1916 年 4 月に陸軍省医務局長および臨時脚気病調査会長を退き正三位となり、7 月に勲一等旭日大綬章を授けられた。しかし希望していた貴族院議員にはなれず、浪人した後、彼は 1917 年 12 月に宮内省帝室博物院総長兼図書頭となり高等官一等に叙せられ、「老いぬれど馬に鞭うち千里をも走らむとおもふ年立ちにけり」という歌を詠んでいる。「空車」は陸軍を退職直後に書き、浪人中に発表された作品である。そして彼は 1919 年には帝国美術院長に就任、1921 年には臨時国語調査会長となっている。

退職して仕事を失うとき、人は多くのことを考え心理状態も平常とは違ったものになるもの

である。彼は軍医として最高のポストまで上り詰めたから、退職後も直ぐにしかるべきポストが与えられると期待したのであろう。しかし結果はそうはならなかった。その微妙な心理状態のとき、日ごろから思っていた天皇や天皇制・官僚制の実態を、「空車」という形で書いたのではないだろうか。「空車」を書いたのは大正デモクラシーの時代が始まろうとしていた時期である。政治学者・吉野作造 (1878～1933) の民本主義に関する有名や論文「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」が『中央公論』に掲載されたのは 1916 年 1 月号でのことであり、こうした時代背景も影響したのか知れない¹⁶⁾。

森林太郎医学博士は、1909 年 7 月 24 日に文学博士の学位も授与された。しかし、その 4 日後、『スバル』第 7 号が彼の書いた「キタ・セクスアリス」が原因で発禁処分を受け、医務局長の要職にありながら、仲の悪かった陸軍次官・石本新六 (1854～1912) から戒飭される屈辱を味わった。そのため彼は、翌年には『三田文学』に「ファステス」「沈黙の塔」「食堂」と続けて政府の言論弾圧を暗に批判する小説を書いた。

森林太郎は脚気病に対する対応を別にすれば頑固な保守主義者ではなく、長州閥のドン山縣有朋とは接触があったが、ひたすら権力者に媚を売る出世主義者でもなかった。まだ二等軍医正 (少佐相当官) であった若いころには、日本医学会の現状を批判したり、自分が主宰する雑誌『衛生療病誌』を使って、石黒忠憲^{ただのり} (1845～1941) 陸軍医務局長ら自分の上司や先輩たちを老策士と呼んで批判する有名な「傍観論争」を仕掛けている。「傍観論争」の第 1 回の「反動者及び傍観者」のなかで、「彼は研究業績をあげない者は学者ではない、老策士すなわち医学の政略家たちを医学の場から追放しよう」と

宣言した¹⁾。彼の遺言は最後の反骨精神の発露であったといえよう。

鷗外は文学者と医学者という二つの顔を使い分けたが、鷗外研究の大部分は鷗外の文学者としての側面である。もちろん森林太郎という医学者・高級官僚という側面が文学者・森鷗外に影響を与えるので、両者の関係も研究対象とされている。しかし鷗外研究家の多くが文学者であるために、医学者としての森林太郎の研究は鷗外研究のなかでは圧倒的に少ない。とくに重要なのは、「鷗外最大の悲劇」と言われる彼の脚気研究と脚気禍に対する頑迷な対応にかかわるものである。

森林太郎と脚気問題については、科学史家・板倉聖宣 (1930～) の『模倣の時代 上、下』 (仮説社)¹⁷⁾ によって詳細に研究されている。森林太郎が陸軍軍医の高官としてかかわった脚気問題の誤った指導によって、日露戦争では 25 万人もの軍人が脚気になり、万単位の軍人を死に至らしめた。この事実は、「鷗外最大の悲劇」として晩年の文学者・鷗外に多大の影響を与えたはずである¹⁸⁾。しかし、このことに言及した研究はそれほど多くはない。

鷗外はエリート意識が強くプライドの高い人物だったので、自分が攻撃されると最後まで反撃・攻撃しようとした。脚気問題ではそのことが裏目に出た。鷗外の作品や行動をみるうえで、それが重要な視点になる。脚気問題に関していえば、1916 年という時点はターニングポイントにあたる時期である。脚気の特効薬が売り出され、泥沼化していた脚気論争も保守派の林太郎たちにははっきりと旗色が悪くなっていた。ビタミン学説の先駆となるフレインス (1865～1944) の理論もすでに発表されていた。このような背景が「空車」という作品に直接影響を与えたようにはみえないが、その後の彼の作

品には間違いなく影響を与えたであろう。

はっきりとその影響が表れるのは最晩年に病苦を押して執筆した「霞亭生涯の末一年」である。霞亭の病名は奇しくも「脚氣」であった。「最後に霞亭という人物に邂逅したのは鷗外晩年の悲劇である」とは、作家・石川淳（1899～1987）の言葉である。しかし、霞亭の「脚氣」こそが、彼が病苦を押して「霞亭生涯の末一年」を書かせたのかもしれない。なぜなら陸軍ではもちろんのこと、学会でも臨時脚氣病調査会でもできなかった脚氣研究についての弁明を、霞亭の病気の診断に託して語ることができたからである¹⁸⁾。鷗外の最晩年の作品と遺言の理解は、医学者としての彼の事跡の総括抜きには不可能であるのは間違いなからう。

参考文献

- (1) 高木秀男『事例から学ぶ科学社会学—そのとき科学者は権力・権威にどう立ち向かったか—』科学堂（2008）
- (2) 直木幸次郎「森鷗外は天皇制をどう見たか—『空車』を中心に—」『Castillo Ueno』12号（2011年10月29日）
- (3) 『日本現代文学全集 7 森鷗外集』講談社（1962）
- (4) 吉野俊彦『虚無からの脱出—森鷗外—』PHP（1980）
- (5) 小堀桂一郎『鷗外選集第13巻』解説、岩波書店（1979）
- (6) 唐木順三『森鷗外』世界評論社（1949）
- (7) 吉田精一『森鷗外全集第5巻』筑摩書房（1964）
- (8) 三好行雄『森鷗外』有精堂（1966）
- (9) 長谷川泉『続森鷗外論考』明治書院（1967）
- (10) 松本清張『両像・森鷗外』文藝春秋（1994）
- (11) 池内健次『森鷗外と近代日本』ミネルヴァ書房（2001）
- (12) 直木幸次郎「日本古代史の研究と学問の自由」『歴史評論』363号（1980）
- (13) 中野重治「遺言状のこと」、吉田精一編『森鷗外研究』筑摩書房（1960）
- (14) 大谷晃一『鳴外、屈辱に死す』人文書院（1983）
- (15) 福永武彦「解説」『新潮日本文学1 森鷗外集』新潮社（1971）
- (16) 高木秀男『近代日本の教育政策と科学技術体制—学問・思想の自由と科学者の社会的責任—上』科学堂（2011）
- (17) 板倉聖宣『模倣の時代 上、下』仮説社（1988）
- (18) 坂内正『鷗外最大の悲劇』新潮選書（2001）

10 月 2 日に羽咋市防災総合訓練

住民組織が訓練の監視行動 - 県内初原発事故も想定した自治体訓練 -

児 玉 一 八 (原発問題住民運動石川県連絡センター)

志賀原発の立地する石川県志賀町に隣接する羽咋市で 10 月 1 日午前、地震と津波による志賀原発からの放射能漏れ事故も想定した「防災総合訓練」が行われました。自治体が独自で、原発事故にも対応した訓練を行うのは、県内では初めてです。原発問題住民運動石川県連絡センター、同能登地域連絡センターは、羽咋市や志賀町などの住民の皆さんによる「実行委員会」などと共同して、この訓練の監視行動を行いました。

今回の「羽咋市防災総合訓練」の想定は、「能登半島中部を震源とするマグニチュード 9（震度 7 強^{*1}）の地震が発生した。この地震による被害は極めて甚大で、特に上甘田・一ノ宮地区に被害が集中し、西北台小学校の調理実習室から火災が発生し、隣の体育館に飛び火延焼拡大中との想定で訓練を実施する。また、この地震により滝沖に津波が発生し、津波から避難するために滝町住民が高台（白山神社）へ避難・集合し、市が準備したバスで避難所の西北台小学校まで集団避難する。今回の地震を受けて志賀原子力発電所が津波の被害を受け、原子炉建屋から放射能漏れを起こした。上甘田地区の住民は、直ちに町会館へ集合し、市の準備したバスで安全な場所へ避難する。羽咋市は、直ちに地域防災計画に基づき、各防災関係機関に対して出動要請を行う。市は災害対策本部を設置し、迅速な災害応急対策を実施するため、西北台小学校に現地対策本部を設置し、以下の訓練種目を実施する」というものです。

* 1：地震の震度階級には 0～7 があり、このうち同一の階級をさらに「強・弱」で区分しているのは、「震度 5」と「震度 6」です。なお、「震度 7」は強弱の区分はありません。

対象地域からの参加人数は、一ノ宮地区（一の宮町 40 人、寺家町 10 人、滝町 30 人）、上甘田地区（柴垣町 25 人、滝谷町 20 人）で、上甘田地区の 2 町の皆さんが原子力防災訓練に参加しました。また、訓練種目のうち、原発事故に関連したものは、「地域住民避難訓練（津波・原子力事故対応）及び災害時要援護者避難訓練」「スクリーニング及び除染訓練」「ヨウ素剤搬送訓練」です。

羽咋市防災総合訓練のうち、原発事故関連の監視行動の速報をお知らせします。

本報告は『原発センター FAX ニュース』（2011 年 11 月 2 日号）の記事を、福井県の防災訓練の参考とするために許可を得て転載させていただいたものです。

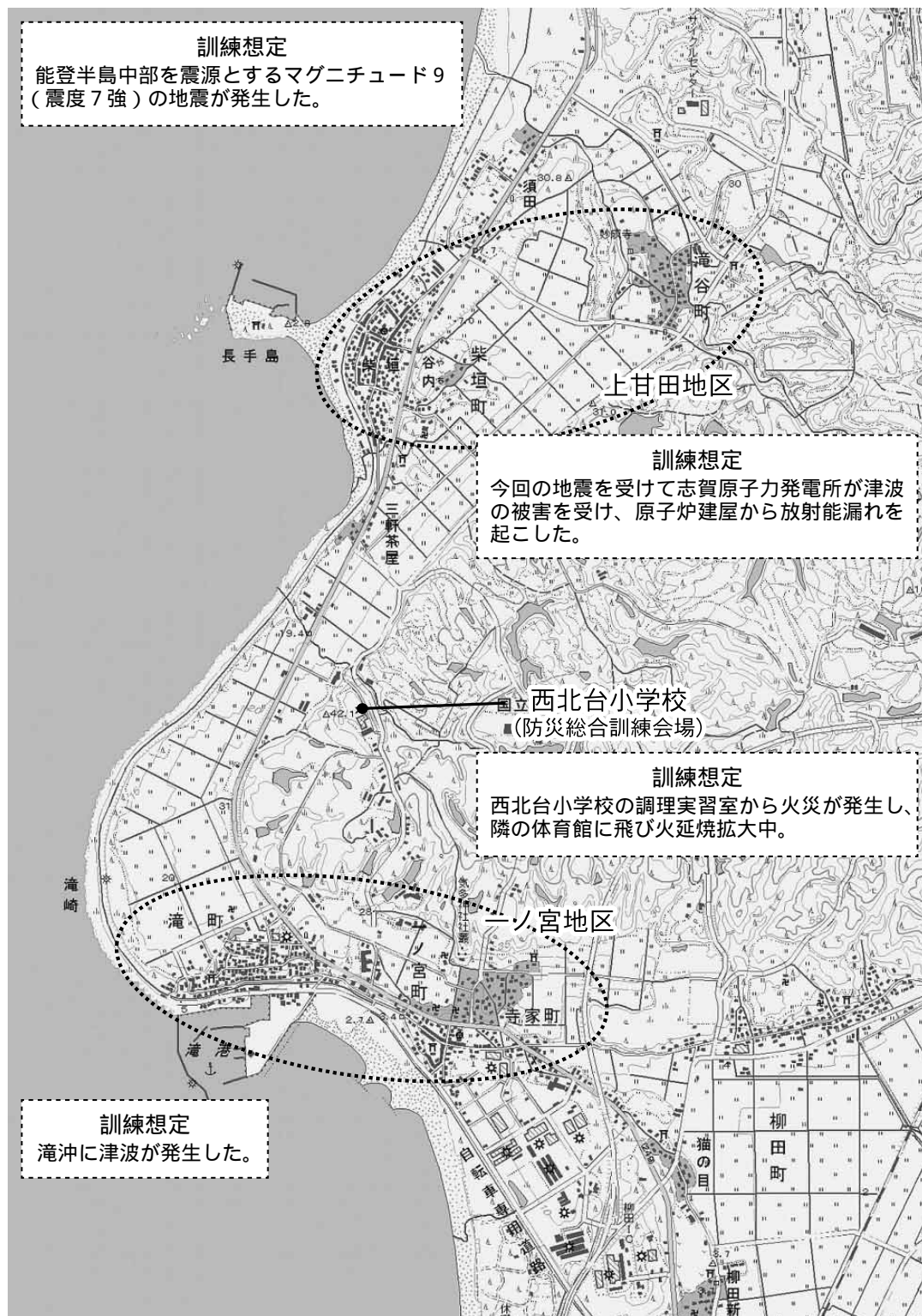


図 1 - 羽咋市防災総合訓練 (2011 年 10 月 1 日) の訓練想定と関連地域の地図

地域住民避難訓練について

柴垣町と滝谷町の住民の皆さんは、町会ごとにマイクロバスに乗って、避難先の西北台小学校に移動してきました（図2）。

移動中に使い捨ての合羽が配られ、全員が着用していました。長靴をはいて避難するよう指示されていたようですが、不徹底だったようで、1台目のバスで到着された皆さんは、長靴をはいていた人は少ないようでした。ハンカチなどで口を覆っている人は、いませんでした（図3）。

原発問題住民運動石川県連絡センターと同能登地域連絡センターはこれまで、志賀町で行われた「石川県原子力防災訓練」の監視行動を5回行ってきましたが、合羽を着用している人は見たことがありませんし、長靴をはくことも指示されていないようです。「石川県原子力防災訓練」は、現実離れた原発事故想定にも象徴されるように、苛酷事故が起こることを考えたものにはなっていません。

その点、福島第一原発で実際に起こった苛酷事故の後に行われた今回の訓練で、合羽と長靴の着用が指示されていることは（不徹底ではあるにしても）、「石川県原子力防災訓練」よりも前進していると思われます。

原発問題住民運動石川県連絡センターと同能登地域連絡センターの『原発事故緊急対策マニュアル』は避難の際の心得で、「服装はできるだけ肌が露出しないように、長袖の服、ズボン、靴下を着用します。気密性のある厚手の生地がいいでしょう。その上に、頭から覆えるフードのあるレインコートを着用し、ビニールの手袋をして、長靴をはきます」と述べています。

スクリーニング訓練について

放射性物質による汚染のスクリーニングに使用する GM サーベイメータ（アロカ社製 TGS-133）は、県保健環境センターの備品2



図 2



図 3



図 4

台を使っていました（図4）。「校正はしていますか」と聞くと、「年に1回やっています」とのことでした。

住民の皆さんは、屋外で2列に並んでスクリーニング訓練を受けていました。志賀原発事故で放射性物質が環境に放出されているという想定ですから、直ちにコンクリートの建物の中に入って、そこでスクリーニングを受ける必要があります。

列に並んだ最初の 3 人の皆さんで、1 人当たりの汚染サーベイに要する時間を測っていましたが、それぞれ 85 秒、111 秒、113 秒とかなりの差がありました（図 5）。測定担当者の GM プローブの動かし方はぎこちなく、慣れていないようでした。プローブを動かすのが速いこと、体全体をサーベイしておらず、特に頭部や靴周辺をほとんど調べていないのは気になりました。2 人の測定担当で、サーベイする範囲や動かす速さなどがずいぶん違うこと、指示計をしきりに見て、GM プローブが体表面から離れてしまうことにも気がつきました（図 6）。

走査するときの体表面からの距離、走査する時の速さ（1 秒に 3～6 cm ほどでゆっくりと）、スピーカー音を ON にしたら指示計は見る必要がないことなど、GM サーベイメータの取り扱い方を日常的に訓練して習熟することが必要と思われる。

スクリーニング訓練の開始時刻は 8 時 35 分で、9 時からは開会式が始まりますから、時間は 25 分間しかありません。測定と人が入れ替わるのに、1 人当たり約 2 分は要しますから、柴垣町の 25 人と滝谷町の 20 人、合計 45 人をスクリーニングするのに、2 台の GM サーベイメータでは少なくとも 46 分かかります。途中で終わるのか、それとも開会式の間も継続するのだろうかを見ていましたが、9 時にはスクリーニングの列はなくなっていました。途中から、ずいぶん端折ったようです。

柴垣町の人口は 828 人（2011 年 9 月 1 日現在）、滝谷町は 147 人（同）で合計は 975 人です。1 人のスクリーニングに 2 分を要するとして、2 時間で終わるとすれば GM サーベイメータは 17 台必要になります。羽咋市の人口 23625 人（同）で同様に計算すると、必要数は 393 台です。GM サーベイメータの設置台数を大幅に増やす必要があり、緊急時に、金沢市太陽が丘の県保



図 5



図 6



図 7

健康環境センターから運ぶことは期待できません。

除染訓練について

柴垣町と滝谷町から避難してきた皆さんのうち、何人かの人たちはバスの中で「放射線量高レベル住民・除染必要」のゼッケンを着けていました。この人たちは、移動式の除染テント（図 7）で除染訓練を受けました。

除染に使ったのは、除染室の横の消防車から

旧供給された水でした（図 8）。除染用の洗剤は使っていません。

「放射線量高レベル住民・除染必要」のゼッケンを着けた人は、除染室を通り抜けながら、10 個のノズルから噴射される水を浴びて放射性物質を「洗い落とし」ます（図 9）。合羽を着た人は、ちょっと立ち止まって水のシャワーを浴びていましたが、合羽や長靴を着用していない人は、水が出ていないところを通り過ぎて、除染をした“ふり”をするだけでした（図 10）。

除染した後の水は、除染 TENT からそのまま流されていました。除染後の水の扱いについて、除染 TENT の横にいた若い消防士さんに聞いたところ、「本来は水層に溜めますが、今日の訓練では流しています」と答えました。

除染訓練の後に、きちんと除染ができたかどうかを、GM サーベイメータで再度測定して確かめる必要がありますが、そのような訓練はされていませんでした。会場の市職員に聞いたところ、よくわからなかったようで、先ほどの若い消防士さんが聞いてきて、「本来は 2 度目の測定を行う必要がありますが、人員の関係で今日は行っていない」と説明していました。

除染訓練を見て、以下の点を改善する必要があると思いました。

- ・ GM サーベイメータで汚染スクリーニングを行う際、どの部分が汚染されているかを記録して、そこを集中して除染する必要がある。いきなり、全身に大量の水をかけるやり方では、効果的に除染できないし、除染後の汚染水の量をむやみに増やす。
- ・ 消防車から供給される水のみで除染していたが、除染剤も並行して使用する必要があると思われる。除染剤は、除染対象物の種類及び汚染核種の種類及びその化学的性状等を考慮して選択され、水のほかに一般に、酸、無機塩、キレート形成剤、中性洗剤、石け



図 8



図 9



図10

んなどが用いられるが、手・皮膚には中性洗剤粉末や酸化チタンペースト（酸化チタンを 0.1N 塩酸でねったもの）、衣服類には中性洗剤（0.1 ～ 0.5%）などが用いられる。

・ 除染作業に使った除染剤、資材などは、放射性廃棄物になるので、あらかじめこれらの廃棄物を散逸させないように別の容器等を準備しておくことが必要である。

・ 除染後には、除染が確実に行われているか

を確認するために、GM サーベイメータで再度、測定を行うことが必要である。

ヨウ素剤搬送訓練

「ヨウ素剤」と書かれた紙をはった箱を、防災訓練本部テントまで走って運ぶだけの訓練でした。

ヨウ素剤投与による効果は、放射性ヨウ素を吸入した後、時間の経過とともに急速に低下していきます（図 11）。ヨウ素剤の服用は時間とのたたかいであり、原発事故時に速やかに服用できる体制をととのえることが必要です。

原発問題住民運動石川県連絡センターは『原発事故緊急時計画についての提言』（1992 年 6 月）で、「集中保管では事故の発生後に退避所で配布するなど、迅速な投与によって十分な効果をあげる上では全く不十分です。石川県のすべての県民に必要なヨウ素剤を準備し、学校・保育園・幼稚園・地域などに配備し、甲状腺障害の危険性が大きい子どもへの対策を優先に、実効ある配布体制をとるべきです」と述べています。

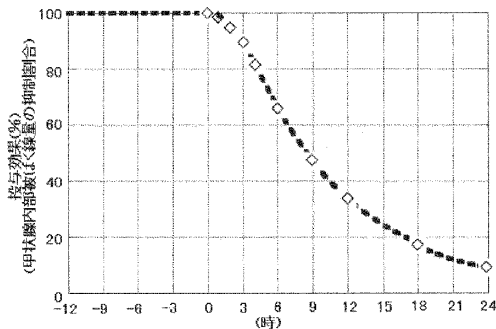


図 11 - ヨウ素剤の投与時期と効果

ヨウ素 131 を 4 時間継続して吸入摂取した場合を例として評価している。横軸は、放射性ヨウ素の吸入開始時刻（0 時）の前後にわたるヨウ素剤の投与時刻（単位：時）。横軸は、甲状腺の内部被曝線量の抑制割合（％）を表した投与効果。

羽咋市防災総合訓練の監視行動をふまえた今後の取り組み

羽咋市が今回、志賀原発から放射性物質が環境に漏れ出す事故も想定した訓練を行ったことは、石川県が EPZ（防災対策を重点的に充実すべき地域の範囲）の拡大を求める住民や自治体の要望に背を向け、国まかせの姿勢に固執しているのとは対照的に、重要な取り組みと評価できます。一方で、さまざまな課題も明らかになりました。

今回の訓練は、日本防災士会石川県支部の皆さん（図 12）や羽咋市、志賀町などの住民の皆さんによる実行委員会など、たくさんの皆さんが監視行動を行っています。今後、情報の共有もすすめながら、羽咋市に対して今回の監視行動の結果をふまえた防災計画・訓練の改善に向けた要望を行うなどの取り組みを進めていきます。

日本防災士会石川県支部の土田 満事務局長が「石川県は志賀原発が立地する上に、福井の原発群からも近い。県内全域で訓練を行う必要があり、県がその先頭に立つべきではないか」（しんぶん赤旗、2011 年 10 月 2 日「東海北陸信越」欄）と述べているように、原発事故を想定した訓練を県内の全自治体が行うこと、そのために石川県が EPZ を拡大して全県を計画区域にすることなどを、求めていく必要があります。



図 12

なお、訓練の内容について羽咋市職員や消防署員の皆さんにいくつか質問しましたが、いずれも真摯に回答してもらえました。石川県原子力防災訓練で同様の質問をした際、何度も「話しかけないでください」と言われたことがあったのとは、対照的であったこともご紹介します。

原発問題を学ぶ― 敦賀フィールドワークに行って

八十島 真 奈 (立命館大学経営学部 4 回生)

1. はじめに

3 月 11 日に発生した東日本大震災とそれに伴う大津波によって、東北の町や人々の生活が破壊され、多くの犠牲者が出ました。さらに、甚大な被害に追い打ちをかけるように福島第一原発で水素爆発が起こり、日本中が震撼することとなりました。この 10 ヶ月間で、全国のあらゆる場所、そして世界中で、原発の安全性について見直す動きが急速に強まってきています。

「風評被害」によって農業や畜産業は立ち行かなくなり、国の暫定基準値をクリアしたにもかかわらず後から高濃度の放射性物質が検出されるという事態が相次いで起こっています。また、緊急避難指示の発令が遅れたことに始まり、政府や東電の原発事故対処の甘さやずさんさが誰の目にも明らかとなりました。

2. 研究サークルでの学び

なぜ今回のような悲惨な事故が起こってしまったのか、なぜ政府や東電、マスコミは情報を明らかにしないのか、原発は本当に安全なのだろうか、ニュースやインターネットの動画で津波の様子や原子力安全・保安院の記者会見などを見ながら疑問に思いました。今回の事故とそれを取り巻く状況をどのように捉えるべきなのか、原発をめぐる問題や再生可能エネルギーの可能性について、春から学生のなかで学習を始めました。

私が大学で所属している社会科学研究会は、社会問題をテーマに学生たちで研究活動を行うサークルです。今年は春から原発問題をテーマとして、安斎育郎先生をはじめ様々な方の文献

を読み、放射能と放射線の違いなど基本的なところから学び、議論を重ねてきました。また、鎌仲ひとみ監督の原発を取り上げた映画、「ミツバチの羽音と地球の回転」や「六ヶ所村ラブソディー」、その他、原発導入の歴史や原発の安全性を検証した特集映像などを見て、毎回、感想交流をしました。

そんななか、「原発作業員の労働実態について知りたい」また「原発によって受け入れ地域の市民生活がどのように歪められているのかを知りたい」という仲間の声があり、日本でもっとも原発が集中している敦賀へ、9 月 18 日～20 日までの 3 日間、フィールドワークに行くことになったのです。

本稿では、私たちがサークル活動の一環として実際に敦賀の町を目にし、また若狭原発の危険性を訴え続ける諸先輩方とお会いして感じたこと、学んだことについて報告させていただきたいと思います。

3. 敦賀の地で学んだこと

3.1 フィールドワークの行程

フィールドワークの中身は、多くの方のご協力で大変実りあるものになりました。以下、どのようなことをしたのか日に分けて簡単に記載しておきたいと思います。講演後には講師の方々と食事に行き、学生たちが疑問や感じたことなどを率直に話し、交流が盛んに行われていたことが印象的です。

9 月 18 日 (日)

- ・美浜原子力 PR センター見学
- ・山本雅彦さん (原発問題住民運動全国連絡

センター代表委員) 講演

講演内容: 福井県 (若狭) 原発の実態と住民運動

9 月 19 日 (土)

・敦賀原子力館見学

・今大地はるみさん (敦賀市議会議員) 講演

講演内容: ①原発と行政, 原発と市民生活
②原発のない町づくりについて

・山本富士夫さん (福井大学名誉教授) 講演

講演内容: 福島原発災害を考える

9 月 20 日 (日)

・もんじゅ見学

3.2 若狭原発の実態

(1) 原発作業員の労働実態

私が強烈な印象として残っていることのひとつに、原発労働者におけるずさんな安全管理についてのお話があります。美浜原発の技術者を経て、現在は原発反対の立場で運動をされている山本雅彦さんの講演のなかであったことですが、労災認定は元請けがしなければならないことだから、原発構内に入って作業する人々の被ばく量を、どうしても認定基準以下に抑えようとするのだというものでした。原発の奥に入って働かなければならない作業員たちは、低被曝で抑えるため線量計を持たずに作業をするそうです。このような非常にずさんな安全管理のもとで、作業員の犠牲と引き換えに原発が稼働しているのだということについて、怒りが込み上げました。

また、定期検査の仕方について、安全性を顧みない実態を知りました。福井の原発で、作業効率を上げるために定期検査の時間を短縮し、そのために危険な状況で作業を強いられ、死亡事故が起こったという話でした。市場原理主義の名の下で命が犠牲にされ、人間らしい働き方ができなくなっている事実、衝撃を受けました。

(2) 住民運動

福井の住民運動については、70 年代～90 年代、主に 80 年代の運動史を新聞記事や写真で分かりやすく紹介していただきました。日本原電の敦賀原発事故隠しの告発や、福井県民の原発を考えるシンポジウム、もんじゅの建設に対する抗議、署名活動など、その他数多くの運動が行われていたことを知りました。また、原発労働者の運動については、70 年代、80 年代のいい加減な被ばく管理に対する反発が高まり、81 年 7 月の敦賀原発事故をきっかけに、日本で初めての原発下請け労働者の組合、「運輸一般関西地区生コン支部原子力発電分会」が敦賀に生まれました。

さらに、大飯原発 3・4 号機の増設をめぐって住民の町政批判が強まるなか、隣接する小浜市民の間からは「影響の大きい小浜市民抜きで、増設を決めることができるのか」という批判が高まっていました。そこで、草の根運動「小浜市民投票を進める会」が結成され、83 年頃から住民が立ち上がるようになったと聞きました。

そして、昨年の福島第一原発事故によって敦賀市政も確実に変わってきているそうです。昨年 6 月 30 日に、増設賛成派と反対派が共同して「エネルギー政策の見直し等についての意見書」をつくりました。また、福島県知事が「脱原発」を明示し、同県議会も全会一致で「脱原発」の立場を明確にしました。「原発銀座」と呼ばれる福井から、「フクシマ」を受けてこのような動きが出てきたことは、大きく評価できることだと思いました。

3.3 複雑な市民環境

美浜原子力 PR センターへ行ったとき、そこで受付嬢として働く女性と個人的に話をする機会がありましたが、学校を卒業して原発関連の仕事に就くのが当たり前だと思い、ここに就職

したと話してくださいました。

また敦賀市の市議会議員をされている今大地はるみさんは、「脱原発」を主張して町をまわっていると、野次が飛んでくる一方で「本当は反対したいけれど、なかなか口には出せないから、誰かが行動を起こしてくれると助かる」という声援を受けることも多いそうです。反原発運動が継続的に行われているといっても、やはり町の基幹産業が原発になっている以上、一般の市民が原発に異を唱えることは、個々人の生活を守ることを考えると相当に困難なことだと想像できます。

市民の主張が暗黙的に抑え込まれ、「原発は無いにこしたことはないけれど、生活のためには仕方ない」というような感情が常に背景にありながら日々の生活が営まれていること、あるいは「都市部に電力を送っている自負がある」といった日本の電力需給の構造的問題の下に生まれる感覚、また「もはや原発なくしては自治体として存続できない」などといった自治体運営の危機感と切迫感のもとで原発推進が行われていることを、今回のフィールドワークで生々しく感じました。また、福島事故を受け、美浜町の山口町長が「安全性が揺らいだ」と言ったにもかかわらず原発を推進する背景として、「町民に理解を得る苦勞をしてきたのに、今さらはしごを外されては報われない」と話したことから（8月19日付、毎日新聞、1面）、国策に乗ってきた原発立地自治体特有の市民との関係がうかがえると思います。

3.4 「ハコモノの町」

敦賀は、見渡す限り原発交付金で建てられたハコモノばかりでした。山本富士夫さんをはじめとする多くの方のご厚意で車を出していただき、原発PR館の見学へ行きましたが、道中、「これも交付金、あれも交付金」と次々に教えてい

ただき、スポーツ施設や文化施設が充実しており、庁舎のようなものも立派な造りだったように記憶しています。実際に町を目にすると、「交付金の町だ」と感じ、衝撃を受けたことを覚えています。

山本富士夫さんは、「麻薬的な交付金」という表現をされていましたが、車の運転にご協力いただいた方のなかで「一度手を出したら抜け出せないもの」とおっしゃっていた方もおられました。また、「活気あふれる商業都市だった敦賀が、今では原発城下町となりました。相次ぐ原発の立地に伴い、簡単に多額のカネが町に入るようになり、市民の力で町をつくるのがなくなってしまった」と今大地さんは語ってくださいました。多額の交付金が入ってくるたびに、行政はあわててハコモノを建てるけれども、高額な補修費や維持費がかかり、市の財政を圧迫しているのだということでした。そこで、2002年の三法交付金制度の法律改正によって、ハコモノというハード面だけではなく、ソフト面にも交付金が使えるようになりました。町で子どもの医療費無料化が掲げられ、その財源は確保されていたにもかかわらず、交付金がソフト面にも使えるようになったことで、いつのまにか医療費無料化の財源が原発マネーになってしまったというお話は衝撃的でした。原発マネーが出所になったという点は、教員の給与についても言えるそうです。

こうしたことから、確かに交付金はかなりの中毒性がある麻薬のようなものだと思います。住民生活にかなり密着したところにまで原発マネーが入り込んできており、原発への依存が高まっているのではないかと学生の間で懸念の声があがりました。

3.5 敦賀の未来

学生からあがった質問のなかに、「福井県の

子どもたちは、原発や放射能についてどのような教育を受けているのか」というものがありました。これに対して、山本富士夫さんから次のような回答がありました。

「福島原発災害が発生するまで、文科省は『環境・エネルギー教育支援事業』という数十億円の予算で原発推進の教育を進めてきたが、福井県高教組から国会への提訴があり、その事業は現在のところ止まっていると聞いている。昨年度までは、この「事業」を基に、福井県だけでなく日本全体の学校（福井大学を含む）で原発安全神話が植え付けられてきた。」

この事業の全国コンクールで優勝した敦賀高校は、原子力容認の立場でプレゼンをつくっていますが、そのパワーポイントのデータを富士夫先生に送っていただき、見てみました。内容は、原子力と新エネルギーのバランスが必要とし、その鍵を握るのはもんじゅだと訴えています。また、これからの課題は技術確立と商業化があるとそして地域住民への知識の浸透ということでした。

高校生が未来のエネルギーを考えること自体は意義のあることですが、教育の影響力は大きく、これは国民の主張そのものが国によって操作されていることのあらわれの一端だと思います。当たり前と思われる常識、つまり原子力は安全だという「常識」を疑ってみるという姿勢は、原発が技術的に未成熟で事故の可能性を免れないことや、事故が起きたときに安全を保障できないこと、また原発が地域にもたらした亀裂、そして原発が稼働し電力を供給している裏側では、原発労働者の多大な犠牲が存在することなど、多くの真実を発見することに繋がるのではないのでしょうか。

また、交付金頼みや原発労働収入などの理由によって原発容認の立場の市民が多くいますが、そのなかには諦めがあったり、さまざまな圧力

で反対できなかったりと、「原発は要る」と言わざるを得ない人々も多くいるのだと思います。原発をめぐる複雑な市民環境が作りだされてきたのです。この点は、沖縄の米軍基地問題と似通っているのではないかと思います。原発が「要る」ものになっていることは、立地自治体のリアルそのものです。それなしには生活できない現状が長年を通して作り出されてきてしまいました。しかし、だからこそ「要らない」ものにするために、原発がなくても成り立つような町づくりをいかに考えていくのかということが、これからの課題になるのではないかと感じました。原発の危険性や再生エネルギーの可能性、原発がなくても電力は賄えるということを訴えていく地道な活動は大変重要ですが、それだけでは敦賀を含む原発立地自治体のリアルは変わらないのではないのでしょうか。「原発がなくても暮らしていける社会」をどうつくっていくのかということも、これから私たちに問われている課題なのではないかと思います。もっとも、町の再生という問題は、原発立地自治体だけの問題として捉えるのではなく、「原発要らない」の声を全国で押し上げることで見えてくるものだと思います。私たち若い世代も含めてそういった問題に目を向けることで、国や自治体の姿勢を変えることに繋がるのだと思います。

4. おわりに

今大地さんは議員活動のなかで「社会的弱者にとって良いことかどうか」ということ、また山本富士夫さんは「国民の立場に立つ」ことを大事にされているとおっしゃっていました。今回のフィールドワークでは、机の上で学んでいるだけでは分からなかったことをたくさん感じることができたと思います。また、市民のために活動をしているさまざまな人とお会いし、刺

激を受けることができ、大変楽しい 3 日間でした。

1 月 14 日に四国・愛媛県の伊方原発 2 号機が停止し、全国でみると 90% の原発が停止したことになります。福井県では高浜原発だけとなり、この 10 ヶ月間の全国の脱原発運動の盛り上がりは驚異的でした。デモの形態は、従来のように団体旗をひらめかせてシュプレヒコールをあげるものばかりではなく、楽しくかわいらしいパレードやサウンドデモと呼ばれるものが登場してきました。子連れで参加するデモや、学生が華やかなプラカードや風船を持って町を歩く姿が多くみられるようになってきています。

また、今回のフィールドワークは、私たちのように社会科学を学ぶサークルの存在意義を再確認するものとなりました。社会を科学的に見る目を養い、人間的な道徳心・倫理観を持ちながら、社会が進む方向を選択するために学び続けていきたいと思いました。いまの脱原発運動を今後も継続させていくように、私たち若い世代も楽しく声をあげていきたいと思います。私はこの春をもって大学を卒業し、就職となりますが、フィールドワークでお世話になった講師の方々に学び、自分のためだけにではなく他者のために働けるような社会人を目指して頑張っていきたいと考えています。

このフィールドワークは、多くの方々の援助によって達成されたものです。関わっていただいたすべての方にこの場をお借りして改めて感謝を申し上げ、拙いながら報告とさせていただきます。

以上

学生企画科目を通して考える ～ “福島” と “日本” における “無関心” ～

内 藤 有 希 (福島大学人文社会学群行政政策学類社会と文化専攻2年)

1. 学生企画科目を始めたきっかけ

福島大学行政政策学類の「学生企画科目」とは、学びたいテーマや内容を学生自ら企画し、活動する授業のことです。そして、この科目のテーマ(私たちが決めたテーマ)が「侍として考える ～内からの福島、外からの福島、君の心の福島～」です。「侍として考える…」に参加している学生は6名、担当教員は1名です。

今回の震災を受けて私たちは「何かボランティアなどをしなければ!」という思いで胸がいっぱいでしたが、いざやるとなったとき「自分は何をするべきなのか」という問題を前に悩んでしまいました。今まで経験したことのない地震の被害、原発事故など、今まで普通に生活していた私たちにとっては、目の前にある問題が多すぎて大きすぎたのです。そんな中、担当教員の大黒太郎先生から「原発に関する映画の上映会を手伝わないか」というお話をいただき、それを手伝うことになりました。この活動を通して原発に対して無知だった私たちも、原発に対する正しい知識とは何か、また現在の原発から発生する問題が何かが分かり、原発・放射能問題への興味・関心が高まりました。

それまでの活動を通して私たちが特に興味を抱いたのは、「福島県の内側にいる人」と「福島県の外にいる人」では問題の捉え方に、少し違いがあるということです。わたしたち福島県民・福島居住者は普通の生活を取り戻すように(4月・5月頃になると、街を歩いていると誰もマスクをしていないし、まるで“取り戻した”かのように)日々を送っています。しかし避難をされている方は、その地で“原発のどこ

ろから来た”と差別を受けているのも事実です。他方、福島県外からボランティアなどの支援にいらっしゃる方はマスクなど重装備をしていて、“おかしい”と思ってしまう福島県民がいたのも事実です。

この「問題に対する捉え方の違い」は何故起こるのでしょうか。それは“風評被害”の問題とも密接に関連することだと思います。

いまなお、原発は収束する兆しさありません。学生の立場から出来ることは、地震やそれに伴った原発事故への知識をつけることだと思います。真剣に、誠実に、それはまさに「侍」のようなものだと思います。私たちはここで得た経験・知識を広く・正しく、福島へ、日本へ、世界へ伝えることが、今、必要とされているのだと思います。

以上を私たちの「学生企画科目」の説明とします。

2. 実際にやってきたこと

前述しました原発に関するDVD(「原発震災・ニューズリール」シリーズⁱ⁾)上映会に携わったことで、大阪大学の今岡良子先生と交流しました。それがきっかけで、私たちの人脈が一気に広がりました。福井大学の山本富士夫先生と知り合いになれたのも、今岡先生のおかげです。

2011年6月23日～26日、大阪・京都・福井へと旅をしました。①福島県浪江町から大阪へ避難された女性の方とお話をする時間、②小出裕章先生へインタビューする時間、③大阪大学のサイエンスカフェへの参加、④大阪大生とのホームステイ、⑤山本富士夫先生をはじめと

する敦賀市民の方々とお話する時間を設けました。

2. 1 福島県浪江町から大阪へ避難された女性の方とお話をする時間

「今でも会津は敵だね」

この方のお話のなかで特に印象に残っている言葉です。会津地方出身の「侍」メンバーは、この言葉にとっても悲しくなりました。「風評被害はなぜ起こるのか」と疑問に思い憤りを感じていたのに、実は既に、ここ福島県内においても「風評被害」「差別」は存在していたからです。

その他、浪江町で原子力発電所のモニターについての経験談を聞くことができました。この方は原子力に関する会議において「原子力の安全性のアピール」をしなければならないような“仕組まれた”環境について説明してくれました。これについて私たちは驚愕し、更に原発に対する不安感が増しました。「原子力の安全」を当たり前だと思ってきた私たち一般市民にとっては大変貴重なお話となりました。

2. 2 小出裕章先生へインタビューする時間

私たちはDVD上映会でのインタビュー映像を観て、京都大学原子炉実験所助教である小出裕章先生の存在を知りました。その映像のなかで、とても真摯に受け答えする姿から、「是非一度お話を伺いたい」という思いを抱き、この機会を得ることができました。

事故以前は「反原発・脱原発」を声高に訴えることが主流ではなく、またそう主張する学者は少数派だったようです。というのも、「国の研究機関が国の方針に異を唱えることは許されない」という構造があり、「情報も国のいいように作ることが可能なのだな」ということにはっとさせられました。そのため、以前までは小出先生の講演会にもあまり人が来なかった

ことをお聞きしました（今では小出先生は全国津々浦々引っ張りだこですが）、これだけの事故が起こってしまった現在、このような主張をする学者を頼りに生きるしかない考える人も少なくないでしょう。そのような中で、所謂“御用学者”のような存在について疑問と不信感が募ります。

事故後、周囲の、自分自身の意識に関して、「本当にこの考えのままでいいのか」という少なからぬ疑問を持っていたメンバーもいました。そのような中で「原発事故後、どういうことに変化を感じましたか」という質問をしたところ、小出先生が「君たちのような学生が私のところに来てくれたことが1番の変化だ」とおっしゃいました。この言葉で、視野が狭くなっていたことに気付かされると同時に、自分たちに少し自信を持てたような気がします。

「被ばくを避けられないなら、それを上回る何かを掴みとるしかない」という小出先生の言葉が1番印象に残りました。これは福島に住む人全員に向けられた言葉だと感じました。この言葉を胸に、福島で生きることを諦めないメンバーがいることも事実です。昔から「反原発・脱原発」を訴えてこられた小出先生の言葉だけに、とても説得力があり、勇気をいただきました。「福島」にいる学生ならではの活動をしなければ、と熱い思いが生まれました。この日から半年以上経過していますが、今でもこの言葉を思い出しながら日々過ごしています。

2. 3 大阪大学のサイエンスカフェへの参加

大阪大学のサイエンスカフェでは、学生と教員が自由に議論している光景が新鮮でした。福島大学では、原発問題についてもみんなと話し合う機会がなかなか無いように思っていたのですが、このイベントは今後の活動のヒントになるのではないかと思います。そして、これま

で「福島大学」の学生や教員としか、震災や原発事故について話しかけることが無かった私たちにとって、「当事者」として人前で話すことは、自分の考えをまとめ、再確認するための良い契機となりました。

2. 4 大阪大生とのホームステイ

福島大生それぞれが大阪大生の自宅にホームステイしました。大阪大生の方々はさまざまな活動をしており、それはとても興味深いものでもありました。例えば「まちづくり」や「教育」に関する NPO 活動をしている方など、「侍」の活動にかかわらず、今後参考になるような貴重なお話をすることができました。また「部落差別」問題を扱っている方がいらっしゃって、私たちが今後直面するであろう問題について考えさせられました。

2. 5 山本富士夫先生をはじめとする敦賀市民の方々とお話しする時間（交流会）

この時間は、初めて知ったことや気付かされたことがたくさんありました。交流会で分かったことは、やはり地元・現場の声が一番わかりやすいということです。山本先生の「風評被害、差別には日本の気質・歴史に問題がある」というお話や、敦賀市議会議員の今大地さんの「選挙において原発反対を言えるようになった経緯」などのお話がとても興味深かったです。このお話から「原発」を取り巻く構造などを詳しく知ることができました。福島でこれだけの事故が起こっているというのに、福井では原発交付金により「脱原発」を訴える人が少ないと同時に、「脱原発」について考えようとさせないという構造。交付金が地元の方にとって本当に大事な役割を果たしている、住民にとって身近で大事なことに交付金を遣うことができる、というメカニズムに私たちは興味を持ちました。

それを直に感じたのが、実際に敦賀市内の商店街で「原発がなくなったら困る。きっと人が減り、商店街は廃れてしまうだろう」という声を聞いた時で、印象に残っています。原発問題を考えるのは本当に難しく、もっと調べていきたいという気持ちが大きくなりました。

福島県内出身の「侍」メンバーも、福島県に住んでいるとはいえ、原発立地地区から離れた場所に住んでいることもあって、「原発」と「日常生活」の関わりを知りませんでした。しかし敦賀でのお話を聞いて、自分の生活からは想像もつかないような、原発交付金を用いている敦賀の「日常」を知ることができました。

今回の旅は「侍として考える…」の最初の旅として、良いスタートを切ることができたと思います。今回の旅を経て、「侍」メンバーそれぞれ色々な思い・考えが芽生えました。それはもちろん「良かった」と思うだけでなく、お話を聞く上で大事なことで、そして、その経験を今後の活動または自分の人生にどう活かしていくかを真剣に考える良い契機になりました。ただ単に「知識を増やす」だけでなく、「さまざまな方とお話をする」という経験は、「侍」メンバーにとって、本当に貴重なことでした。

3. 「福島」にいる身として

私たちは福島で暮らし福島で友達・家族と共に過ごしています。もちろん、日常生活で原発や放射能の話をすることはあります。日常の会話、講義、さまざまな場面にその話は紛れ込めます。本来の講義内容を変更して、原発についての話を盛り込む講義もあります（例えば「憲法」の講義で、「原発と人権」について触れます）。

3.1 自分の「無関心」

事故当初、正しい情報というものが政府・東京電力側から提示されないため、何が“安全/危険”について自分で動き、考え、判断するしかないと思っていたという「侍」メンバーもいました。そこで原発についての情報を提供できる環境（DVD 上映会、広河隆一写真展等）に居れば、自分の知識を増やせると同時に、同じように知識の無い人に対しての“知るきっかけ”になれると考えました。しかし DVD 上映会等を開催しても、参加者（特に学生）は非常に少なく、“関心の無い人は参加しない/関心のある人の中でも一部のしか参加しない”という状況でした。私たちからすると「どうしてみんなは考えてくれないんだ」という焦り、苛立ちなどから「無関心は悪だ」という構図を取ってしまいます。しかし見方を変えると「不安を煽る」という、原発問題等について触れることへのタブーもありました。

私たちが「反原発・脱原発」をいくら考えても、それらの行きつく所は理解の範疇を越えたものになってしまいます。なぜなら私たち一般市民は専門的な領域についての知識はほとんど無く、科学者に「こう証明されているから」と科学の名の下に理論を振りかざされてしまったら、私たちの疑問はあたかも簡単に（半ば強制的に）解決してしまいます。

そのため、素朴な疑問すら考えることができず、「こんな質問をしてもいいものか」と、考えるものごとを恥ずかしく思うことがある、という「侍」メンバーがいることも事実です。また考えてみたところで、専門的な領域で理解が及ばなく、私たちではどうしようもないことに気付かされることも多々あります。それが徐々に“無関心”に繋がるようになってきました。

また、友達や、この科目の仲間たちと原発や

放射能の話をすると言いましたが、ここでも、“無関心”という、最近私たちが引っ掛かっているワードが登場します。

私たちは今まで、さまざまな活動を行ってききましたが、時折とても虚しくなる時があります。福島県外の方々の方が、この事故に対して積極的に活動していると感じることがあるからです。「自分よりも周りにいる人の方が原発事故について真剣に考えている」「みんなの活動ぶりを見て焦る」と日々思っています。

3.2 どこまでいけば「関心がある」といえるのか

そもそも、どの段階まで行けば「関心がある」と言えるのでしょうか。私はデモに参加もしないければ、“確信を持って”「反原発・脱原発」を訴えているわけでもない。

私たちが“原発”について考えてみたところで、目に見えるように世論を変えるということは出来ません。自分たちなりに考えて行動を起こしたとしても、なかなか変化が見えてきません。例えば、前述しました DVD 上映会等の参加者（特に学生）を増やそうとし、さまざまな宣伝をしても、参加者はあまり増えないという状況等が挙げられます。身近な場面でも、一朝一夕では成果を得ることは難しいと実感しています。しかしそのような中でも、とても活動的な運動を行っている団体もあるのが事実です。

私たちの活動での原発に対する理解が及ばない場合、それを「関心がある」と言っていないのでしょうか。他のメンバーがそう思っていないことも、私自身、そう思うこともあります。ネガティブな判断ですが、悩んでしまいます。

3.3 テレビの向こう側の出来事としての「福島」

3.11 後、地震やそれに伴う原発事故の映

像が、ニュース番組で流されました。4 月くらいまでは、全国で問題意識を共有していたのかもしれませんが、現在はどうでしょう？

県外に住む友人や知り合いに会って、「そういえば地震どうだった？」「そういえばあんな事故があったよね」等、もはや地震と原発事故が“終わったこと”として語られているという光景がしばしば見られます。

震災・事故当初ほどニュース映像が流されていないことにより、だんだん問題意識が薄れてきているような気がします。そしてそれは国民の関心が下がっていることの顕著な表れではないかと思います。

そこで、「関心が下がっている＝無関心の人」と「関心のある人」が一緒になって話し合える機会を設けることが必要なのではないか、という考えが浮かんできます。福島県内／外に居るからこそ伝えられることがあるように、いろいろな立場の人たちが集まりそれぞれの意見を聞くことは、今を生きる私たちにとって大切な行為なのではないでしょうか。関心のない人は「無関心」で終わらず、「無関心なりの意見」や「なぜ無関心なのか」を発言できる機会が重要だと思うのです。それによって「無関心」になった経緯を知ることになり、相互の主張を理解し合えると同時に、さまざまな角度から震災と原発事故を捉えることが出来ると思います。前述しました「無関心＝悪」という構図についての考えにも変化が見られるのではないのでしょうか。

福島にいる限り、また日本にいる限り、私たちは震災と原発事故について「無関心」でいることは許されないことだと思っています。だからこそ、さまざまな異なった意見を持つ人と“話す”ことの重要性が問われるのだと感じています。

福島原発が爆発し、「安全な原発など無い」ということが自明のものになったはずなのです

が、未だに「安全な原発にすればよい」という意見を聞きます。更に原発の稼働再開に賛成する市民が多い、という原発保有市町村の話さえ聞きます。これは日本国民が“原発事故は福島県で起きたこと”、つまり“テレビの向こう側で起きたこと”という認識をしているのではないのでしょうか。

この事故を福島の事故と捉えるのか。それとも日本の事故として捉えるのか。その実、福島原発事故での放射能による汚染は福島県だけでなく、日本各地、それどころか世界でも観測されています。この事故から私たちは“原子力から脱する段階へきている”ということを経験しなければならぬのだと思います。

そして、“無関心”が広がりつつある日本を見つめ直す時、それが今なのではないのでしょうか。

ⁱ 藤本幸久監督 森の映画社・影山事務所

夭折した女性活動家・伊藤千代子のこと

高 木 秀 男 (日本科学者会議福井支部)

1. はじめに

「書物というものは、参考書としてもものを書くときや仕事に、あるいは知識・教養として一回でも役立てばそれで元がとれる」といった趣旨のことを、何かの本で読んだことがある。筆者もまったく同感で、ついつい沢山の本を買ってしまう。特にここ 2、3 年は新著『近代日本の教育政策と科学技術体制—学問・思想の自由と科学者の社会的責任—上, 下』¹⁾ (科学堂) を書くために、いつもより沢山の本を買って読んだ。

1 冊本を読むと、その本に出てくる文献を探して読むので、つぎつぎと読まなければならぬ本や論文が出てきていつまでたっても収束しない。今回出版した新著を校正している間にも文献を読んでいたので、校正の段階で文章を追加したり修正したりして印刷の「ワープロセンター HOPE」さんに迷惑をかけた。

伊藤千代子のことは、この本の第 5 章 2 節に「治安維持法の女性犠牲者・伊藤千代子と岩倉靖子」に登場するが、校正が終わった後で東栄蔵 (1924 ~) の『伊藤千代子の死』(未来社)²⁾、『信州異端の近代女性たち』(信濃毎日新聞社)³⁾ を入手し、関連した論文を見つけることができた。もっと早くこの本やその論文が入手できて読んでいたら、新刊のなかでもう少し触れられたし、修正できたのにと残念であった。そこで本誌の誌上をかりて改稿を書いてみることにする。

2. 同級生・伊藤千代子と平林たい子

若い女性の身で治安維持法の犠牲となって夭

折した人では、相沢良 (1910 ~ 36)、伊藤千代子 (1905 ~ 29) と岩倉靖子 (1913 ~ 33) が有名であるが、この小論では伊藤千代子について紹介することにする。千代子は 1905 年 7 月 21 日、現在の諏訪市湖南の農家に、伊藤義男・まさよを両親として生まれた。諏訪市役所湖南支所の除籍簿によれば、母まさよは 1887 年 1 月 12 日に諏訪郡中洲村の岩波久之助の長女として生まれ、17 歳の時、子供のなかった伊藤よしただけ義男・よね夫妻の養子になった。

そして翌年、東筑摩郡四賀村の赤沼茂十郎の四男・義男を婿養子に迎えた。義男はまさよより 1 歳年下で、そのとき 17 歳であった。ふたりの結婚届が出された 6 日後に千代子が生まれた。伊藤家は旧家で伊藤義男は後に村長を務めるほどだったので、貧しい農家の四男だった義男が人手のない伊藤家に雇われ、まさよと相愛の中になったのではないかと推察される。

しかし 1907 年 2 月、母まさよが 20 歳の若さで亡くなり、その 1 年後、父・義男は協議離婚となり、以降、千代子は養祖父母に育てられるが、人の好い伊藤義男は多くの人の連帯保証人となって広い土地を失い、1913 年 2 月、千代子が小学校 2 年のとき亡くなった。その後は、養祖母と千代子は小さな家に移り駄菓子屋をやって細々と暮らすようになった。それを見かねたまさよの実祖父母は孫の千代子を引き取り、母の実家から小学校に通った。

転校した中洲小学校の同級生には、後に作家となる平林たい子 (1905 ~ 72) がいた。千代子もたい子も成績抜群で、二人はいつも競い合っていた。二人は 5 年生のとき担任となった

川上茂（後に上条に改姓）（1895～1954）から白樺派自由教育を受けて成長したという。ただし、「伊藤千代子ころざしの会」会員の今井清^{きよみ}水（1936～）の論文「中洲小時代の川上茂」⁶⁾では、川上茂が白樺派自由教育を行なったとする見方が根拠を示して否定されている。

そして小学校を卒業すると、二人はそろって県立諏訪高等女学校（現・諏訪二葉高校）に進学した。入学時はたい子が首席で、卒業時は千代子が総代となった。二人が入学した年、アララギ派の詩人・島木赤彦（1876～1926）の推薦で諏訪高女に教頭として赴任してきたのが、東京帝大文学部出身の歌人・土屋文明（1890～1990）であった。千代子は、すぐに全国最年少の 29 歳で校長になった土屋とその妻のテル子から大きな影響を受けた。土屋は教頭時代には若々しい情熱と厳格さでもって英語を教え、校長になってからも修身の授業を担当した。国定教科書を使わず、もっぱら芭蕉の「野ざらし紀行」や「奥の細道」などを講義し、女生徒たちに好評であった。

東栄蔵の『伊藤千代子の死』には、次のように書かれている。

「土屋文明はまた外に向っては教育への干渉に抗しながら、内に向かつては教師ひとりひとりの個性を認めて自由に勉強させた。——中洲小学校で伊藤千代子を教えていた若き清水多嘉示（1897～1981）のひめていた資質を見抜いて諏訪高女に招き、図画教育に新風を吹き込んだり、教師たちに輪番で卒業生に講話させることで研究の刺激と機会を与えたり、図書はどんどん買い入れさせて合評会をやったり、また研究記録というノートを職員室に下げておいて、誰でも自由に調べたことや疑問点などを書き合うことによって、ひとりの勉強がみんなの収穫になるようにしたという。このような諏訪高女の雰囲気の中

で、独学で理学博士になった千野光茂（1888～1957）のような教師も出ることになる。」

伊藤千代子と平林たい子はこのような信州白樺教育運動が花開いた諏訪高女で学んだが、平林には次ような有名なエピソードがある⁷⁾。

平林たい子は堺利彦（1871～1933）訳の『ゾラ（1840～1902）の『ジェルミナール』』を読み、感激のあまり堺に手紙を書き文通をつづけるようになった。そのうち彼女は学校を辞めて東京に出て社会運動を手伝いたいと思い、その機会をねらっていた。彼女は関西方面に修学旅行に出かけるときに一人東京に出て堺のところに身を寄せようと考え、同級生にも協力を求めて実行した。しかし同級生たちは後で怖くなって先生に事実を告げてしまった。結局、たい子は東京から連れ戻され土屋校長に謝罪に行く羽目となった。彼女の処分については職員会議でも大きな議論となったが、校長の決断で退校処分にはならなかった。土屋校長の人柄と平林たい子の個性を物語るエピソードである。

3．伊藤千代子の活動

伊藤千代子は 1922 年 3 月に諏訪高等女学校を卒業し、4 月より諏訪で高島尋常高等小学校の代用教員となったが、川上茂との恋に破れたこともあって、前々から希望していた英語の勉強の為に女子英学塾（現・津田塾大学）を受験した。しかし英会話力の不足のため不合格となり、1924 年 4 月、英語教育で定評のあった仙台の尚綱女学院（現・尚綱学院高校）高等科に入学し 1 年間学んだ。遠い仙台の学校に行ったのは、祖母たつから結婚をすすめられ、それが嫌で家出のような形で仙台に行ったという。仙台は千代子が尊敬していた島崎藤村（1872～1943）が若き日に東北学院の教師として過ごした土地でもあった。祖母たつも千代子の熱心さと固い決意にほだされるようになった。

そして 1925 年 4 月、千代子は東京女子大学英語専攻部 2 年への編入学を果たした。東京女子大学は清新の気風あふれるキリスト教主義の学校で、大学草創期の 1921 年に社会学科を設け、講師陣には森戸辰男 (1888～1984)、大内兵衛 (1888～1980)、矢内原忠雄 (1893～1961)、古在由重 (1901～90) ら新進気鋭の学者が顔をそろえていた。我が国のミッションスクールは、公立学校が「良妻賢母」教育に統一された後も、少数派として生き残って頑張った。男子とは対等の人格を持った主体的な人間作りを目指したのである。東京女子大学は初代学長が新渡戸稲造 (1862～1933) で、伊藤千代子が入学したころは安井てつ (1870～1945) が二代目の学長を務めていた。

安井はキリスト教徒で、東京女子高等師範学校 (現・御茶ノ水女子大学) を卒業後、文部省留学生としてイギリスに留学してオックスフォード・ケンブリッジ両大学で学び、1900 年に帰国して東京女子高等師範学校教授となった。1904 年には、シヤムで最初的女子教育専門学校であるラーチニー女学院設立に協力し校長格の教授を務めた。帰国後、彼女は東京女子大学の学監となり、1923 年に学長となった⁸⁾。

伊藤千代子は、大学時代には社会科学研究会の中心的メンバーとして活躍した。当時の東京女子大の社会科学研究会には、千代子のほかに 2 年後輩で後に野呂栄太郎 (1900～34) の妻となる塩沢富美子 (1909～91)、志賀義雄 (1901～89) の妻になる渡辺多恵子、是枝恭二 (1904～34) の妻になる波多野操^{みさお}、安東義雄と結婚する宮崎哲子、明治期の社会主義運動家・服部浜次 (1887～1945) の娘・服部民子など人材がそろっていた⁹⁾。

伊藤千代子は、具体的にはどのような活動に参加したのであろうか。東京女子大では公然の社会科学研究会のほかに、非公然のマルクス主

義学習会が組織されていて、千代子はそこの講師となってマルクス (1818～83) の『賃労働と資本』『共産党宣言』、エンゲルス (1820～95) の『家族・私有財産・国家の起源』などを講義していたという。しかし彼女は突然学生寮から姿を消した。彼女の部屋の机の引き出しには、おびたしいローソクの垂れた跡が残っていたという。寮は 10 時で消灯であったが、隠れてマルクスやレーニン (1870～1924) の本を読むために、夜ローソクをともして勉強 (当時ローベンと称されていた) していたのである。

千代子が姿を消したのは、東京帝大新人会出身の活動家・浅野晃 (1901～90) と密かに結婚したためである。浅野晃は陸軍軍医の家に生まれ第三高等学校から東京帝大法学部にすすみ、日本最初の学生運動団体である東京帝大新人会^{1, 4, 5)}に入った。彼は 3 年生になったとき、在学のまま自ら希望して 1924 年 5 月より翌年 2 月まで月給 95 円で諏訪中学の英語教師を務めた。彼が教えたクラスには五味智英、小尾庸雄、藤森正夫、村上多喜雄など個性と才能をもった生徒がいた。浅野の思想を特に強く受け止めた村上は、1932 年はじめに日本共産党東京市委員長として活躍したが、同年 8 月 15 日に検挙され、懲役 15 年の刑で服役中に腸結核が悪化し 1939 年 5 月 21 日に 31 歳の若さで亡くなった³⁾。

浅野は諏訪中学校からもどって 1925 年 3 月、東京帝大を卒業。4 月に日本共産党に入党し、すぐ産業組合中央部附属産業学校の講師を 1 年ほどやり、ついで産業労働調所^{しげお}で、野呂栄太郎、志賀義雄、水野成夫 (1899～1972) らと働いていたが、1927 年のはじめ東京の主な女子大の社会科学研究会幹部たちの指導を担当することになり、千代子と知り合うことになったのである。

浅野は諏訪に住んだこともある親近感から千代子とよく話をするようになり、そのひたむきさと聡明さに心が引かれていった。そして 1927 年 8 月、労農党諏訪支部への所要で上諏訪町に行ったとき、夏休みで諏訪に帰郷していた千代子に会い結婚を申し込んだ。その年の 9 月、浅野は日本共産党中央委員候補となったが、千代子はまだ東京女子大の学生だったので、二人の結婚はごく少数の人以外には伏せられていた。

千代子は長野県・岡谷市で闘われた歴史的な大争議・山一林組製糸工女のストライキ (1927 年 8 月) の支援を行ない、郷里の長野 3 区で初の「普通選挙」(1928 年 2 月 20 日) を闘う労農党候補・藤森成吉 (1892 ~ 1977) を応援した。このとき長野 3 区では、無産政党三派が共闘して労働農民党の藤森を擁立した。

この選挙には 2 名の文士が立候補した。文藝春秋社社長の菊池寛 (1888 ~ 1948) と東京帝大文学部出身のプロレタリア作家・藤森成吉である。菊池は安部磯雄 (1865 ~ 1949) を党首とする社会民衆党から、藤森は労働農民党からの立候補であった。菊池の選挙参謀は山本有三 (1887 ~ 1974) ・久米正雄 (1891 ~ 1952) ・小島政二郎 (1894 ~ 1994) が務め、武者小路実篤 (1885 ~ 1976) ・正宗白鳥 (1879 ~ 1962) ・横光利一 (1893 ~ 1947) ・片岡鉄兵 (1894 ~ 1944) ・高田保 (1895 ~ 1952)、そして漫画家の岡本一平 (1886 ~ 1948) らが応援演説にたった。演説会場は聴衆で連日満杯であったが、選挙結果は 6,000 票たらずの次点で敗北した。

一方、藤森の立候補を知り、東京から諏訪市出身で岩波書店店主の岩波茂雄 (1881 ~ 1946) をはじめ、三木清 (1897 ~ 1945) ・森戸辰男・大塚金之助 (1892 ~ 1977) ・林房雄 (1903 ~ 1975) ・三宅雪嶺 (1860 ~ 1945) ・

長谷川如是閑 (1875 ~ 1969) ・村山知義 (1901 ~ 77) ・小山内薫 (1881 ~ 1928) ・青野季吉 (1890 ~ 1961) ・小牧近江 (1894 ~ 1978) ・平林初之輔 (1892 ~ 1931) ・前田河廣一郎 (1888 ~ 1957) ・江馬修 (1889 ~ 1975) ・佐々木孝丸 (1898 ~ 1986) ・金子洋文 (1893 ~ 1985) ・蔵原惟人 (1902 ~ 91) ・山田清三郎 (1896 ~ 1987) ・葉山嘉樹 (1894 ~ 1945) ・片上伸 (1884 ~ 1928) などそうそうたる学者・文化人多数が応援にかけつけた。官憲の選挙妨害や 1 票 1 円といわれた買収選挙で、藤森は当選こそできなかったが 6,919 票を獲得して善戦した。

伊藤千代子は、この 1928 年の「普通選挙法」による衆議院議員選挙では、労働農民党への選挙カンパを要請され、学費など大学卒業のために祖母から仕送りしてもらったお金を、北海道で立候補した山本懸蔵 (1895 ~ 1939) の選挙資金に寄付し、彼女は大学卒業をあきらめる苦渋の決断をした。

このときの山本懸蔵の選挙の様子については、小林多喜二 (1903 ~ 33) が『東俱知安行』(改造社) に詳細に描いており、その冒頭の書き出しには次のように書かれている。

「ストーヴは、何時も石ッころのような石炭で、ブスブス^{へや}室の中をけむたくしていたが、選挙が初^{ママ}ッてからは毎日、グウン、グウンうなって勢よく燃え上がっていた。石炭が一杯入ってあった。

板壁や破れた襖に、

一. 金壺円也	一労働者より
一. 二銭切手十枚	某
一. 鶏卵七個	××工場有志
一. 参拾円也	東京×××子
.....	
.....	

30 円もの大金をカンパした「東京×××子」



小林多喜二『東知安行』初版

とは、具体的には「東京 伊藤千代子」のことではなかったのか、残念ながら今となっては確かめようがない。

4. 伊藤千代子の死と顕彰

千代子は 1928 年 2 月 29 日、22 歳のとき日本共産党に入党したが、その年の 3 月 15 日、治安維持法で逮捕され、市ヶ谷刑務所に投獄されたのである。彼女は獄中での野蛮な拷問にも屈せず同志を励まし続けて闘ったが、夫・浅野晃の転向などもあり拘禁性ノイローゼを発症した。そして栄養失調も加わり東京府立松澤病院に入院したが、1929 年 9 月 24 日に急性肺炎により亡くなった。まだ 24 歳の若さであった。

市ヶ谷刑務所における千代子を知る貴重な資料に、千代子が亡くなった後の 1929 年暮れ、浅野の妹・あやが作った千代子の『追悼録』が

ある。獄中から千代子が近親者や友人に出した手紙を集めてガリ版刷りにし、密かに関係者に配った資料である。検閲を経た千代子の手紙であるが、彼女の獄中での姿が垣間見られる。「本のない一日は身の置き場もなくなりました」と本の差し入れを懇願し、政治・経済・歴史の本を貪欲に読書しドイツ語の勉強も続けていた。

そんな中で市ヶ谷刑務所において衝撃的な上申書事件がおきた。1929 年の 2 月か 3 月ごろ水野成夫が口火を切って、河合悦三（1903～66）がこれに油を注いだという。浅野は村山藤四郎（1899～1954）らとともに反対したが、河合の手記を読んだから賛成するようになったという。門屋博、南喜一（1893～1970）らも賛成した。水野らの主張は①現在の党の解散、②コミンテルンの支部としてではない独立の日本共産党の結成、③天皇制打倒のスローガンの撤去ということであった。

これらの上申書を書いた同志は 1930 年にみな出所し、日本共産党労働者派（解党派）を作り運動したが、党からは除名され運動は完全に失敗し、1932 年には解散のやむなきに至った。浅野は日本共産党労働者派の運動が挫折した後、佐野学（1892～1953）と鍋山貞親（1901～79）の共同転向声明の潮流に乗り、1934 年には右翼に転落し、戦時中は保田與重郎（1910～81）らの日本浪漫派に加担して国家主義の文学論を展開した。戦後は 1955 年に立正大学教授となり定年まで勤めた。三島由紀夫（1925～70）が自衛隊でクーデターを呼びかけ失敗し自決したとき、浅野の詩「天と海」を朗読したという。なお解党派の詳しい経緯については、思想の科学研究会編『共同研究転向・上』（平凡社）¹⁰⁾を参照されたい。

ところで、彼女をはじめ東京女子大の学生が治安維持法違反で逮捕されたとき、大学当局はどのような態度をとったのであろうか。当時

このような思想弾圧事件で逮捕されたときには、放校、除籍、退学、無期停学などの処分を行なうのが普通であった。しかし、安井学長は学内外の批判にもかかわらず断固として処分に反対し、一人として思想問題を理由にした処分者を出さなかったのである。おそらくこのような学校は全国的に見ても例のないことではなかろうか⁸⁾。

伊藤千代子の死の直後、彼女への弔意を香典として送ろうという趣旨の「呼びかけ文」が、経済学者の櫛田民蔵・大内兵衛、評論家の蔵原惟人、新人会の服部之総（1901～56）・大宅壮一ら 10 人の発起人で出されたことが知られている。また諏訪高等女学校時代の恩師であった土屋文明は、千代子の死をいたみ言論統制の厳しかった 1935 年、歌誌『アララギ』第 28 巻 11 号に、「某日某学園にて」と題して次の 6 首の歌を発表した。

語らへば眼か^{まなこ}がやく処女^{おとめ}等に思ひいづ
諏訪女学校にありし頃のこと
清き世をこひねがひつつひたすらなる
処女等の中に今日はもの言ふ
芝生あり林あり白き校舎あり
清き世^{をとめ}ねがふ少女あれこそ
まをとめのただ素直にて行きにしを
囚へられ獄に死にき五年^{いつとせ}がほども
ころざし^{をとめ}つつたふれし少女よ
新しき光の中におきて思はむ
高き世をただめざす少女等ここに見れば
伊藤千代子がことぞかなしき

伊藤千代子の遺骨は郷里諏訪市の龍雲寺墓地に葬られた。黒御影石の墓には「円覚院智光貞殊大姉」という法名が刻まれている。そして 1997 年 7 月 21 日には千代子の顕彰碑が建立された。この顕彰碑には前記の土屋文明の歌のうち後半の 3 首が「伊藤千代子がこと」と

して刻まれている。また 2005 年 7 月 17 日には、諏訪市の文化センターで「伊藤千代子生誕 100 年記念講演会」が開催され、作家の澤地久枝（1930～）が「証言者としての伊藤千代子」と題して講演し、1,000 名もの参加者があった。2009 年 9 月 23～24 日には、諏訪市で「伊藤千代子没後 80 周年記念行事」が行なわれ、全国から 300 人もの人が集まった¹¹⁾。伊藤千代子の顕彰・研究活動は点から線へ、線から面へと急速に進展している。

詳しくは藤田廣登（1934～）の『時代の証言者 伊藤千代子』（学習の友社）¹²⁾、藤森明（1932～）の『ころざしいまに生きて－伊藤千代子の生涯とその時代－』（学習の友社）¹³⁾、ホームページ「伊藤千代子ころざしの会」¹⁴⁾、伊藤千代子顕彰碑建立記念誌『今、新しき光の中に』¹⁵⁾などを参照されたい。なお伊藤千代子の同級生であった平林たい子もまた、プロレタリア作家から反共・右派作家へと波乱の人生を歩んだ。彼女の作家人生については巖谷大四（1915～2006）の『物語女流文壇史』（文春文庫）¹⁶⁾などを参照されたい。

参考文献

- (1) 高木秀男『近代日本の教育政策と科学技術体制－学問・思想の自由と科学者の社会的責任－上、下』科学堂（2011）
- (2) 東栄蔵『伊藤千代子の死』未来社（1979）
- (3) 東栄蔵『信州異端の近代女性たち』信濃毎日新聞社（2002）
- (4) 石堂清倫、堅山利忠編『東京帝大新人会の記録』経済往来社（1976）
- (5) スミス『新人会の研究－日本学生運動の源流－』東京大学出版会（1978）
- (6) 今井清水「中洲小時代の川上茂」（産別記念・労働図書資料室調査・研究）（2008）
- (7) 中野好夫編『現代の作家』岩波新書（1955）

- (8) 青山なを『安井てつ傳』東京女子大同窓会
(1949)
- (9) 塩沢富美子『野呂栄太郎とともに』未来社
(1986)
- (10) 思想の科学研究会編『共同研究転向 上』平凡
社 (1959)
- (11) 藤田廣登「近づく伊藤千代子没後 80 年」『し
んぶん赤旗』2009 年 9 月 16 日号
- (12) 藤田廣登『時代の証言者 伊藤千代子』学習の
友社 (2006)
- (13) 藤森明『ころざしいまに生きてー伊藤千代子
の生涯とその時代ー』学習の友社 (1995)
- (14) 「伊藤千代子ころざしの会」ホームページ
[http://www.lcv.ne.jp/~tiyoko17/hikari.
html#SEC7](http://www.lcv.ne.jp/~tiyoko17/hikari.html#SEC7)
- (15) 伊藤千代子顕彰碑建立記念誌『今、新しき光の
中に』1～5 号
- (16) 巖谷大四『物語女流文壇史』文春文庫 (1989)

= 新著紹介 =

西條敏美著『測り方の科学史 地球から宇宙へ』恒星社厚生閣

高 木 秀 男 (日本科学者会議福井支部)

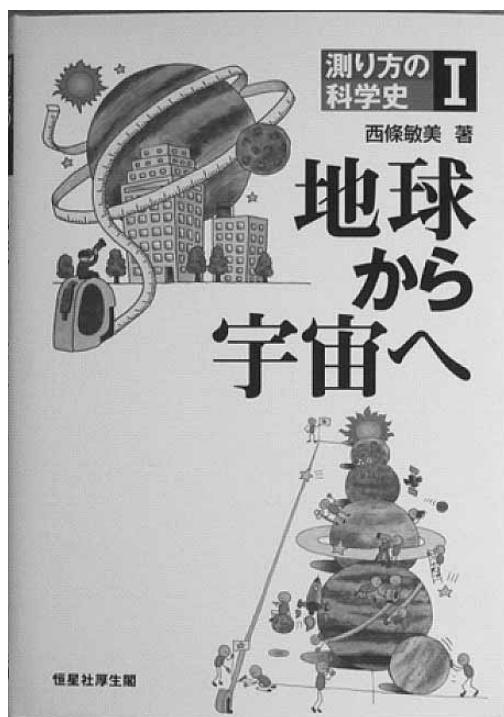
科学史家・西條敏美氏の著書は本誌でも何度か紹介した。今回紹介する西條氏の新著『測り方の科学史Ⅰ 地球から宇宙へ』は、著者が会長を務める徳島科学史学会の機関誌『徳島科学史雑誌』に1998年から連載したものを一書にまとめたものである。

著者がこれまで出版した本をみればわかるように、一貫して科学史家としての着眼の良さが光っている。今回の「測り方の科学史」という視点も同様で、それを調べてみようと思ったのはあとがきによれば、小学校時代の担任の先生の講義に興味をもったことに遠因があるという。

その先生は、「象のような重いものの重さはどうやって測ったらよいか」という話をしてくれたという。また「紙一枚の厚さを測ってみよ」とか、「電信柱の高さはどうやって測ったらよいか」といった、直接測れないものの測り方について、そのアイデアを話してくれたという。幸運にもすぐれた小学教師に出会ったことが、著者がのちに科学史家として大成した要因の一つになったようである。

この『測り方の科学史Ⅰ 地球から宇宙へ』では、直接測ることができない地球や宇宙といった大きなスケールの物理量をどうやって測ってきたかを紹介しており、続巻の『測り方の科学史Ⅱ 原子から素粒子へ』で、小さいスケールの物理量の測り方を紹介する予定になっている。

私自身も金沢大学の非常勤講師をしていたとき、1年生に「地球の質量をどうやって測るか」といった問題の類題をレポートの課題にしたことがある。もちろんこういう問題は普通の物理



学の教科書には書かれていない。そのため学生は何か適当な参考書を探すか、自分の頭で考えなければならない。地球の質量を推定する方法はいろいろあり、実際、過去にはいろいろな方法によって測られてきて、時代の進展とともにその精度も向上してきた。本書を読めば、その方法が科学史的観点から解説されていて、興味深く勉強することができる。1798年に発表されたねじれ秤を用いた有名なキャヴェンディッシュの実験は、特にくわしく数式を使って説明してあり、力学の法則はどのように使うのかという勉強にもなる。

地球の年齢は何歳かという問題については、私も拙著『若造たちの物理学—二十世紀科学革

命の人間模様―』(科学堂)のなかで紹介したことがある。地球の年齢問題は、聖書年代学、歴史学、地質学、生物学、物理学、天文学など、広範な分野がからんだ科学史の有名なエピソードとしてよく知られている。そこに登場する人物もアッシャー大司教、ニュートン、ヴォルテール、ハットン、ライエル、ダーウィン、ケルヴィン、ラザフォードなどまことに多彩である。

私の本ではこの問題が、科学の発展がどのように人間の認識を変えていくかという啓蒙説話として書かれているのに対し、西條氏のこの本では、「測り方の科学史」として地球の年齢の推測が歴史的にどのようになされてきたかを、以下の順序でさらに詳しく説明されている。

1. 各民族における神話的時間意識
2. キリスト教神学による地球の年齢の推定
3. 地層の新旧の比較と化石による相対年代の決定
4. 動物相の変化から古生代の始まりの時期を推定する方法
5. 地層の厚さから年代を推定する方法
6. 岩石の風化速度から地球の年齢を推定する方法
7. 海洋の塩辛さによる地球の年齢の推定
8. 冷却実験による地球の年齢の推定
9. 放射性元素による地球の年齢の推定

ここでは地球の質量と地球の年齢という二つの例をあげたが、そのほかこの本でどんな物理量の測定について書かれているかは、以下の目次を参照されたい。

西條敏美著『測り方の科学史Ⅰ 地球から宇宙へ』恒星社厚生閣

目次

第1章 地球

1. 地球の形とその大きさの測り方

2. 地球の質量の測り方
3. 地球の年齢の測り方
4. 地球の核の大きさの測り方

第2章 月

1. 月までの距離とその大きさの測り方

第3章 太陽

1. 太陽までの距離の測り方
2. 太陽の質量の測り方
3. 太陽の表面温度の測り方

第4章 恒星

1. 恒星および銀河までの距離の測り方
2. 恒星の大きさの測り方
3. 恒星の質量の測り方
4. 恒星の年齢の測り方

第5章 宇宙

1. 宇宙の大きさの測り方
2. 宇宙の年齢の測り方

参考図書案内

科学史年表Ⅰ

あとがき

事項索引

人名索引

A5判上製 137 ページ 定価 3,000 円+税



編集後記

東日本大震災の年があけた。新年の多くの年賀状にも、新しい復興の年に向かう意気込みが感じられた。だが日本の前途は容易ではない。資本主義社会の矛盾が世界中で噴出しているからである。日本だけでなく世界中が閉塞感にとらわれているとき、「強い指導者」を求める民衆の心理につけ入ってファシストが登場してくることを歴史は教えている。大阪市長・橋下徹という童顔の独裁者は、まさにそうして登場した一人である。マスメディアが彼のヤクザ同様の手法を批判しない現状では、その本性を暴露して市民に知らせ、橋下徹の高笑いをストップさせるのは知識人の社会的責任である。

さて今号には原発問題では、石川県羽咋市の防災訓練の様子を伝える児玉一八氏の報告と、原発問題に取り組んでいる立命館大学と福島大学の学生たちの報告を掲載した。学生たちの真摯な活動と報告は、かならずや福井大学の学生・院生たちの参考になるであろうし、ぜひ活動を見習ってほしいものである。児玉氏の報告は、彼が編集している『原発センターFAX ニュース』（2011 年 11 月 2 日号）の記事を、福井県での防災訓練の参考とするために許可を得て転載させていただいたものである。児玉氏は日本

科学者会議石川支部の中心メンバーで、放射線の専門家でもあるため福島原発事故以来講演依頼が殺到し、これまで 70 回以上の講演をこなした超人である。福井支部でも山本富士夫代表幹事と平野治和光陽生協病院長が多数の講演依頼に応じているが、児玉氏の講演回数は全国一ではないかと推察される。

今号に私は「森鷗外の重要作品「空車」について」と「夭折した女性活動家・伊藤千代子のこと」の二つの論考を投稿した。森鷗外は文学者と医学者という二つの顔を持った興味深い人物である。私は以前本誌に「医学者としての森鷗外」を連載し、それに手を入れ他の論考とあわせて単行本『事例から学ぶ科学社会学』を出版した。それを読んだ人から直木幸次郎氏の論考「森鷗外は天皇制をどう見たかー『空車』を中心にー」を送っていただいた。それが非常に興味深いものだったので、その感想を書いたものが前者の論考である。後者は昨年秋に出版した『近代日本の教育政策と科学技術体制』の第 5 章 2 節に書いた伊藤千代子に関する記述に手を入れた改稿である。ご意見・ご批判をいただければ幸いである。

最後に新刊案内として、これまで何度も紹介したことのある科学史家・西條敏美氏の『測り方の科学史 Iー地球から宇宙へー』（恒星社厚生閣）の書評を掲載した。

(高木秀男)

福井の科学者	第 117 号	2012 年 2 月 20 日発行
編集・発行	日本科学者会議福井支部 頒価 500 円	
連絡先	〒 910-8507 福井市文京 3-9-1 (郵送の場合) 福井大学大学院教育学研究科 680 円 教職開発専攻(教職大学院) 森 透 研究室気付 TEL/FAX 0776-27-8725 E-mail t-mori@u-fukui.ac.jp	

= 会員の著書紹介 =

書名 畜産物と健康 --卵・牛乳・肉の生産から考える

著 者 加藤武市 発 行 科学堂
発行年月日 2005 年 6 月 定 価 1500 円

福 井 県 医 療 生 活 協 同 組 合

〒 910-0026 福井市光陽 2 丁目 18 - 15 TEL (0776) 27 - 2318
FAX (0776) 24 - 8290

光 陽 生 協 病 院

TEL (0776) 24 - 5009

つるが生協診療所

TEL (0770) 21 - 0176

ショートステイきらら

TEL (0776) 21 - 8525

光陽生協歯科診療所

TEL (0776) 24 - 8784

光陽生協クリニック

TEL (0776) 24 - 3310

たけふ生協歯科診療所

TEL (0778) 22 - 5666

デイケアさんさん

TEL (0776) 24 - 5524

さかい生協歯科診療所

TEL (0776) 67 - 6333

光陽訪問看護ステーション

TEL (0776) 24 - 9996

つるが生協在宅総合センター「和」^{なごみ}

TEL (0770) 25 - 4311

光陽ホームヘルプステーション

TEL (0776) 24 - 9997

小規模多機能介護施設しんじょういこい

TEL (0776) 60 - 2110

光陽訪問看護ステーション居宅介護支援事業所

TEL (0776) 24 - 9990

総合企画印刷

広告・パンフレット・DM・雑誌・記念誌・機関誌
自費出版・会員名簿・会員管理・アンケート集計

(有)ワープロセンター HOPE

〒 915-0847 福井県越前市東千福町 21-4
TEL: (0778) 24-1146 FAX: (0778) 24-2339
e-mail: hope01@galaxy.ocn.ne.jp